

麻 生 路 郎 主 宰

川柳雜誌

第十一卷

第二號



川柳雜誌 第十一卷第二號目次

文苑

創作

女性川柳に就て 麻生路郎(一)

武玉川初篇研究(三) 梅本秋の屋 魚(三)

月金。銀。鐵 二南、艸樂(三) 水車、山雨樓(三)

川柳天神緣起(三) 藤里好古(四)

紫石氏偲びて 石丸春峰(五)

川柳バイロツト欄 福田山雨樓(五)

舞鶴へ來て 安川久流美(二)

雜 葭乃さん 食滿南北(三)

春 省線から 正岡 蓉(二)

筆 恐縮覺之帳 住田 耽(二)

秋 無 水谷 鮎美(二)

重い空氣 姫田 夕鐘(四)

江戸のうはさ 二南 生(五)

川柳書架(五〇) 住田 亂耽(三) 麻生路郎(五)

近作 柳 樽 麻生路郎選(四)

川柳 塔 麻生路郎選(三)

粒々 集 鞍馬、柳秀、五健(三)

日本名物名所川柳大阪の巻

十日 戎(八) 麻生路郎選(四)

本社 頌春句會 (四)

各地 柳壇 路郎、綠雨、二南整理(五)

柳壇 畫報 (三)

一路集 向上 朝田新永(四)

繃帶 中澤濁水(四)

西之町MEMO 綠 雨(六七)

編輯の窓 山雨樓(六)

川柳家戸籍調 山雨樓(四)

表紙 畫 柴谷宰二郎

題字 麻生路郎



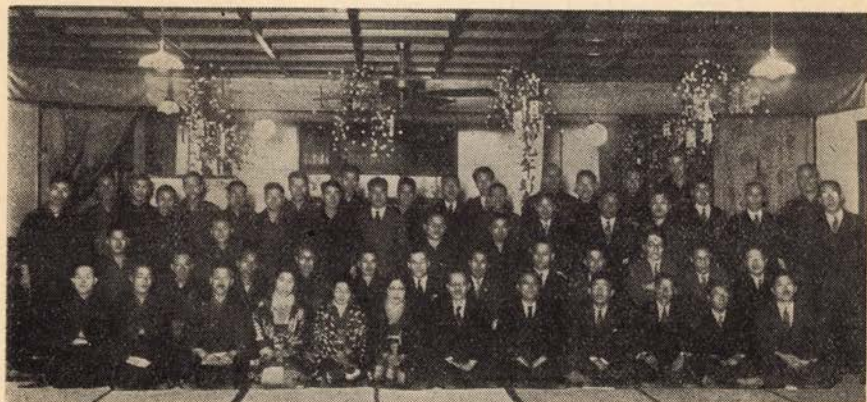
近作

麻生路郎

日の御子御降誕にあやかりて

伏屋にも一月廿日男の子
子澤山僕の枕は何處へいた
止むを得ずした孝行をもてはやし
庭の廣さが老境をおもはせる

報・畫・壇・柳



聚時・羊一・子冬・女見端・幹主郎諸・しよ萬・夢翠・南二・水新・石雲・秋豆（リヨ右列前）——影獵急走會句春新社本
 泡影・幸踏・流泉・路夕・天櫻・鐘夕・車水・呼冬・葉四・月露・子京王・馬天・子食没・九十里（列二第）・廣末・風桂
 佳・光泰（列四第）・笑一・戲昇・櫻白・天沐・歩遊・人勝・ない久・路閑・人麗・子柳白・助の燈・王富・瑠籬（列三第）
 （影獵日六月一）・生丹・ぶのし・丸角・月霞・郡太松・二輝・二勝・光秋・子抱山・月山・雄雨山・峯



——影獵途露の會句年新版支旅御——戎日十の登・春の成

夢翠・郡多・石雲（列後）・勇・るつみ・幹主郎諸・葉四・々々（リヨ右列前）

柳・壇・畫・報



紅樓・世好・平公・鬼青・太静（りよ右列前）——日本文学振興会集の會
 ・人散・子心風（列後）るぼの・爾松・助之流・人義・夫諸・夫康（列中）
 （影攝日七月一）人直・馬一・鹿理・陸鳳・氏月



君夢曉本國の「人柳川」



君山二統の「京」



軍統・子紅・海春・坊春（りよ右列前）——會句立創部支派居新
 心・時青・羽白・夫静・路洋（列後）松小・紅賢・明夢旅（列中）
 （影攝日六月一年四三九一）市



近作柳樽

路郎選

強硬に出る氣の道で百舌鳥を聞き
 げんざいを食ふて別れる姉思ひ
 決斷のにふい男を犬が嗅ぎ
 減つてゆく焼香溜り寒うなり
 よい色にせめて揚れと海老思ひ
 吊り下げたどれも淋しい服の色
 一對の櫓に蔽ひ去らんとす
 夢夢のかけらにも亡き母の顔
 月よりも白きを見れば涙なり
 山深く心さぐれば鳥が鳴く
 上役の個性を見ぬかねばならず
 陽のなかに土工のすがたきよかりき
 長男の茶漬の音のたのもしや

大段

大門

同

舟々

同

以都女

同

觀月

同同



皆働くひとで朝の電車はよい
 花赤く鉄素直な音を立て
 妹がふくらむ乳房と話してた
 恩師の愚痴へ合槌つり合はす
 しんみりと語れば嗤ふ自暴自棄
 體驗とするには不況續き過ぎ
 給與品ばかりで巡査いかめしい
 酒のめばほんとの僕になれそうだ
 出勤のどこに野心があるか靴
 その日ぐらしへ父になりきる
 牧場の朝美しき歌よまん
 教會を出て金持の多い坂
 靴下がねちけてゐますバスガール
 寒空へ轉業もせず辻將棊
 缺食兒家にも食はぬ母があり
 生涯を耳はしづかな姿なり
 星遠くかほそき兩手あるばかり
 びやうゐんの匂ひをしらぬ蝦蟇がゐる

神戸

長野

同

神戸

大阪

釜ヶ浦

貧兒

同

同

柳兒

同

同

有爲郎

同

同

九葉

同

同

利生

同

同

噴兒

同

同



貯金する氣になつて來た肩の凝り
 ネクタイの結び目これもつとめです
 戀の翌朝金の勘定
 おでん屋の世辭こそばゆし十二月
 人間と神専用のお酒です
 月初め豆炭一俵着きにけり
 秋うららかインの裔で大地主
 新聞の似た人生に慰められ
 金儲がしたく手の出ぬふところ手
 二から二を引いてる生活子が生れ
 小使の愚痴をストープ聞く所
 水を汲むうしろ姿が人の妻
 日曜の朝寢プランは未だ出來す
 都會病患者が戎橋を行く
 その肩へ觸れてはならぬ女なり
 頓才を残してみんな散り果てぬ
 議論してふと手にさわる帶の冷え

無鬼氏退社

神戸

京都

愛媛

東京

大阪

同

某人

竹雅

黙紅

同薰舟

同九波

同

同素月

同



波の音過去清算に丁度よし
 妻の顔趣味にちかづきさうもなし
 逝く秋の陽を掌にためて見つ
 手拭が乾く夜風はたのしけれ
 工場の柵がこわれてる非常時
 耳を閉いで金に執着
 すゝめは去んだわたしも窓をしめませう
 ある日の天井わたしを蠟人形に
 一塊の土と化す身の忍従や
 純情へ迫る人の吐息かな
 立腹の自分の鼻がみへて來た
 郵便のない晝の雲みあげたり
 飛び切つて的のはすれたのも嬉し
 溺死體蟹の食指が微動する
 極月を意識して居る晝の風呂
 さかろうて淋しく母の影をみる
 凡夫さかなしく富士を描きぬ

長女生る

神戸 八幡 横濱 望ヶ池 高知 今治 松江 大阪 同

麥刀子 同 夫柳子 同 十七八 同 寒子 同 映珠 同 芳岸 同 冬生 同 木圭 同 夜玉



凱旋將軍のごとく妻眠りゐる
 さりながらいとしきものに黒髪や
 現代を語つてブルの子も哀れ
 アパートの注文聞きは女なり
 芝居裏八掛並んで更けてゆく
 會場の床踏みしめて默殺か
 父したふ空はてもなくのびてゐる
 さんげするやうに妾は語り出し
 交換手話し續けて歸るなり
 酌人はなんぼ受けても平氣で居
 夜勤者に月は味方でゐてくれる
 社の椅子で理想うつかり喋べり過ぎ
 職人の欠伸は猫にまでうつり
 やまひならこのさみしさに耐へませう
 或る日に
 世の中がおもしろくなりぬびはの花
 老車夫の或る日拍車をかけられる
 一錢をめぐめば乞食指がなし

千里山

大脱

同

龍田

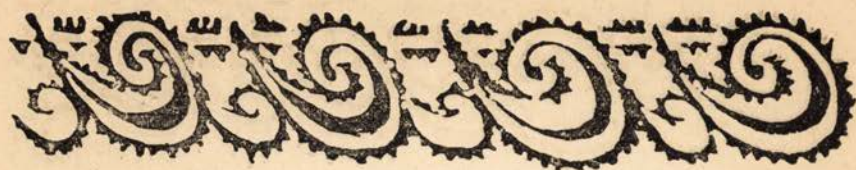
松坂

神戶

藤ヶ池

今治

同 沐 天
 同 栗
 同 岩 石
 同 翠 峯
 同 沃 里
 同 吉 左 右
 同 愚 龍
 同 紫 陽
 同



大きく笑つてまづしき茶漬の音で
仕事着の泥が冷めたく乾いてる
葉巻くゆらし、うらに、うらのある生活
かゝてきのひばなちらしてろじのかぜ
インフレに月はいつもの知らぬ顔
せかゝと歩けば彼女笑ひけり

大阪送懐通吟

堂島の相場を頼み少なくて見
實用をよそに地下鐵走つてゐ
嘘が嘘にならずに面白う働ける
求人への訪へば保険外交員
憂鬱のカケラとなつて爪が飛び
憂いでる譯聞きに來るウエトレス
銀幕を飛び出しそうにスキー見え
たまに來た道頓堀に時雨する
溜息へべつたり白粉ぬりつぶし
そのたとへ我が弱點に觸れてゐし
兄弟の無い淋しさを讀書する

島根 今治 盛ヶ池 神戸 高松 京都

羅門 心府 巷巴 朝雨 柳夢 波樓

加賀

義風子

名古屋

三都

大阪

桂風

同

いの助

同

白戀

神戸

巨鯨

京都

丁路

高知

満沙誇

金澤

緑水

大阪

たけを

同

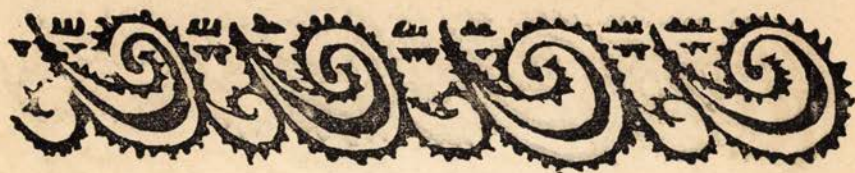
寒草



お互に神經すこし磨ぎ過ぎた
 老人の獨斷に負けてやり
 豊繁の蛙を唄つて女教員
 産制の亭主は酒も止めしとか
 灰皿へふと親友を思ふ秋
 首すじを洗ふに馘首の噂され
 指先に蟻をつまんで考へる
 兒の嘘へ笑つてをれぬ出納簿
 加持もやり祈禱もやつて瘦せるのみ
 表札をうたぐつた顔隙見され
 マゝの顔もわからない泣き聲
 弱い氣を出すなとがつた霜柱
 あきらめる部屋に明るいお陽様
 口笛を吹いて犬などよんでみる
 落葉ひらく鳩が豆くうてゐる
 振り切つて歸つた晩もこんな雨
 問はず語りも自己の辯解

曉美チャシへ

同	鳥取	伊豫	今治	大坂	同	同	同	同	小松	神戸	今治	松江	京都	大阪	同	四條	
夏光	法泉子	松花	輝親	白蝶	曠原	秋光	元山	しとしと	霞川	小櫻	小松	小松	祥月	清春	一沫	末廣	孤鶴



ヨカくと九州戻りせきたて
サービスが膝に重たくこそばゆし
吸殻に個性を残して客は去に
ある所に有つて妬めぬ紙幣の束
中學出給仕でないを自慢する
この俺の馬鹿さを犬は未だ知らず

伊左實君入替

萬歳の聲とゞろけ君はは笑み
金策の歸へり靴だけ鳴つてゐる
氣苦勞がめつきり増へた皺に見え
盲目へ眼鏡の兄は眞面目なり
新年の妻に娘の頃の聲
○焼へ歸る女工の氣が揃ひ
見合とも知らず氣軽く話し合ひ
冬の夜汽車に肥えた男の旅行談
借金も拂て新年待遠し
萬策盡きて女にひけをと
愚痴を聞く火鉢無性の鬚を撫て

松坂	名古屋	廣島	新宮	泉州	大阪	愛媛	今治	島根	名古屋	奈良
健二	輝亭	小三	しのぶ	バツト	史郎	ますを	三八朗	承春	一曉	華坊
白菊	世都象	伶人	喜郎	月茶	柳志					



風邪引きへ冬の夜あつけなく暮れる
 特價品人の心理の悲しさよ
 鐵筋コンクリート計理士白い地圖
 獨身の秋へ振子の高い音
 あゝ鳴く鳥のいとしき空に戀を捨て
 箸おいて母は話をきいてくれ
 公休日父のボールへ子はかまへ
 唇紅がひからびる夜の風鳴りよ
 貧乏の暮しにバケツ底が漏り
 金婚が來ても格氣はまだ止まず
 水仙の蕾破りて今朝の雪
 年の暮れ恩師の墓碑が偲ばるゝ
 鉢卷に聲を囁らして年の暮
 お互に死ぬ心算りにて四日すぎ
 自家用に泥かけれた作業服
 友愛の二人へ秋風冷めたすぎ

大 阪 大 和 松 江 和 歌 山 新 宮 伊 豫 今 治 愛 媛 大 阪 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

青 海 天 馬 千 草 百 文 昨 夕 木 矢 子 賀 宵 明 浪 人 堅 愛 子 久 子 良 之 佑 さ と し 詩 郎 春 海



女性川柳に就て

—世の婦人達に與ふ—

麻 生 路 郎

一昨年亡くなつた近藤飴ン坊君が會て「女性川柳一萬句」といふ四六版横綴の句集を刊行したことがあつた。

書名から考えると、女性が詠んだ川柳を一蒐めたやうにうけとれるが、事實は女性を詠んだ句を蒐めたものであつた。本の名をつけることもなか／＼難しいことだと思つた。

x

女性を詠んだ川柳も蒐めて見れば面白いには違ひないが、私は女性が詠んだ川柳方に、より多く興味をもつてゐるので、私にも少し時間の餘裕が與へられるならば、女性の詠んだ川柳名句選のやうなものをつくつて見たいと思つてゐる。

と、いふのは婦人に川柳を創るやうにすゝめると、妙に逡巡されるので、その理由を考えて見ると斯うである。

川柳といふものは穿ち本體であり、辛辣な皮肉や嘲罵が到るところに迸出してゐるので、女性の寄りつけないものである。

殊に姑を詠んだ句から、姑のモデル問題が生れたり、夫を詠んだ句から夫のモデル問題が惹起した時には家庭内に思ひも設けぬ風波が立た／＼ぬとも限らない。姑や夫に御機嫌のいゝ時ばかりもあるまいから、とんだ時に、諷刺されたやうに感違ひしられないとも限らない。君子は危きに近よらず、まあ／＼「かも」や「かな」でも作つて楽しんでゐれば無難であるといふ結論に到達するらしい。

姑の日なたぼつこは内をむき 古句

珠數さら／＼とおしもんで小言なり 同

糸巻の向ふに亭主踊つてゐる 同

亭主が死んで賑かな家になり 同

といふやうな句を詠めばなるほど、どんなに、お人よしの姑さんでも、御機嫌のよかりさうな筈がないから、世の婦人達の考え方も一應はうなづけないことはない。

が、斯うした婦人方に、モ一度靜に川柳を見直して欲しいのである。

川柳家は決してツラ當てに川柳を創つてゐるのではない。不平不懣の塊を川柳の型式を藉りて、爆發させてゐるのではない。川柳家はこつそり皮肉つたり、諷刺したりするほど、それほど弱い人間ばかりではない。

川柳家は、もつと大きな心で、川柳を詠んでゐる。たま／＼モデル問題を惹起しさうな諷刺や皮肉な句を詠んだからとて、それ事態が目的でないことは昔の落首のやうに匿名でないところから見ても想像は出來やう。

川柳家は大局から物を觀やうとする。高所から、或は側面から觀やうとする。従つて自己省察でも明透である。冷徹である。第三者の立場から物を觀る訓練に熟達するために、時に人間的に冷めたく感ぜられることがある。しかしこれは人間性を深く擱まうとすれば自然の歸趨と云へやう。

昭和七年の五・一五事件で首相が斃れた時に、私が

待つたなしの歩に刺されたる犬養毅

といふ句を發表したところが、犬養毅の人格をたたへ、路郎といふ男は實に冷めたい人間だといふやうな批評をされたことがあつた。これではでんでん川柳が判つてゐないのだと思つたから別に釋明もせずに黙殺して置いた。私も犬養毅の人格には敬服してゐる一人であるが、あの句を読んで直ちに犬養毅の死屍をむちうつものと考えるやうでは川柳の觀方からして、もつと研

究を要する。これでは姑をはゞかつて川柳を詠まうとしない婦人達から一步も出てゐない。

この句は犬養毅の如き偉大な人物であつてこそ生きて來る句である。モ少し句を深く味つて欲しい。

私はズツと以前に

果敢さは車掌の戀の刹那主義

といふ句を詠んだことがある。この句を読んで車掌を侮蔑したものだと云はれては助らない。私の知人にも車掌をしてゐるものはあるが、それ等の人達から、路郎は怪しからんと、ネズミまれた覚えのないところを觀ると、彼等はこの句が自分達を侮蔑してゐると思つてゐないのだ。

キリストは目で視て、いゝ女だと思つただけでも既に女を姦してゐると云つたさうだが、目姦は人間の持つ大きな弱點かも知れない。私はそこを詠んだものである。

そこに自己省察が行はれる。人間性の陶冶が行はれる。又一面には止むに止まれぬユダの反逆性も見られるのである。

川柳を味つて興趣の深いのも、そこにあると云はねばならぬ。

私達は人情の機微を穿つた川柳から更に溫い情熱を誘導せしめられる。自然を詠んだ美しい情景からは人の世の汚濁を漉返へすことが出来るのだ。

×

だからと私はいふ。世の婦人方は恐れず憶せ、川柳を創られたらいつだらう。

雜筆春秋

舞鶴へ來て

安川久流美

四面硝子戸で溫室の中にゐるやうな朗らかな氣持の部屋、机に向つた直ぐ前からは西山公園の山つゞきが初冬の景色を見せて山の端にぼかしたやうな雲から薄い陽が光つてゐる、二階窓から見た建物のぐるりは空き地なので日曜の午後を七八ツの兒童が師走の空に何の不安もなく遊び廻れてゐる。それを見てゐると自分もすぐ郷里に残して來た子供のことを思ふ。わけて今年六ツになる惡戯盛りの茂道が、着ぶくれて、北風吹く裏町にやはり遊んでゐるゝなどゝ四十男のセンチメンタリズムである。特に父を慕ふてゐた彼も、幾らか淋しいだらう……と取越苦勞してゐるのも子煩悩の親バカといふものか。そのくせ、一しよに居れば子供の不平に親の氣短かといふ鹽梅で、寧ろ

はなれてゐる方が、今の私には氣が休まつてしづ心にはなれる。

×

×

何しろ顔馴染といつて耳さん二人の處女地を踏んで此方一句は過ぎた。訪ふに友なく、行くに勝手知らず、全く刺戟のない日を送つてゐるが、郷里といつても六時間餘でその日に歸れる位の距離だから、そんなに遠い旅として思はぬ、日曜のつれづれを川柳の選やら、手紙の整理などしてゐると短い冬の日には直ぐ黄昏れて、又明日働くといふ強い生活戰線には過去一年半の「浪人生活」は眞に勿體なき日めぐりであつたやうに思ふ。旅へ出て見ると何かしら趣味に縁をつなぎたくなるものである、これから閑を見て新らしく川柳の開拓を志さうか。(十二月十日記)

葭乃さん

食満南北

大變長くお目にかゝりません。玉出の本通でキツサテンをなすつてゐられるさうですが、一度出かけて見たいと思つてます。お出で下すつたのはたしか北畠の高見の家だつたと思ひます。例によつてまた宅がへをしてゐます。六甲のふもとで兎も角御近所は大分にお金持らしいので氣が引けてなりません。しかし當分は此處にゐるつもりです。御主人と御一緒に一度お出かけ下さい。お子達でお忙がしいでせう。また御商賣でお手がぬけられますまいが、かつて脚本をお描きなつた時代へ戻つて、しみ／＼お話がしたいとも思つてゐます。私は此頃やう／＼と悲しい芝居がすこし描けるやうになつたかと自分でさう思つてゐるのです。かつては涙といふものには全く縁がなかつた私でした。金の味も、子供の味も、病氣の味も、何にもしらないで子供のやうにキャツ／＼と遊びまはつてゐたものでしたが、此頃A社からくるわづかの小爲替を大事にしたり、勝山通りの兄貴の子供を預かつて、シミ／＼力になつてやうと思つたり。また舊冬半歳も病床の人になつて、いろ／＼の事を體驗して、このところちよいと人間らしくなつてゐる

のです。扱 うよつて見ると、お二人で遊びに來られ過去が妙になつかしくなつて、こんなことを描いてしまつたのです。いつか御主人と御一緒に大和の五條かへ行つた事がありました。歸りに奈良ホテルへ行つて飲んだことなどが妙に思ひ出されて、ちよつと泣いて見たのです。私は手放しで泣けるやうになつた事を恐らく、御主人も貴女も御存知ないでせう。病氣中に亂耽君が來てくれないで、鉢にかじりついて——イヤまだそんなに寒くなかつたかもしれません、何かしら大分長い時間喋舌つてしまつたのですが、其時も御二方の事は話に出て來たのです。私は病後表面は大變賑やかですが、肚の中では淋みしくつて淋みしくつてやりきれないのです。何故でせうか。私は昔馴染とだん／＼遠ざかつて行くからではなからうかと考へてゐます。私の師匠である村上浪六先生や、恩師である田中智學居士や、私を貢いでくれてゐる野口信一君や、私を作者として本當に心から迎かへてくれる片岡仁左衛門丈や、さうした人に會へなくなつてゐる事さへ限りなく淋みしいのに、其上昔馴染のお友達がだ

ん／＼私から遠ざかつて行くやうに思はれてならないのです。一度何とかして私もうかどひませうか、是非くりあはしてお二人連れて來て下さい。今の私の心持をお話したいと思つてます。御主人によろしくお傳へ下さい。さうして私の病氣をお見舞ひ下さつた亂耽君によろしく御鶴聲を願ひます。それに私を見なほす會に來て來さつた縁雨君にも特別におことづけを願ひます。左様なら。

省線から

正岡 蓉

病人がちだ、とりこみだ、ためにおびた／＼の執筆不可能だ、焦燥だ、懊惱だ、三勝だ、半七だ、——さて、その揚句、歳晚、友だちがほつくり死んで、それが、トマのどんづまりのおん厄拂ひましょ、厄落し、とはなつた次第だ。

33年は、かくて、文字通りの凶年だつた。ろくな仕事もできなかった。——いま昭和八年12月30日正午、やつと、すべて

の災厄から解消されて、春の仕事をとのふべく、少しは街のたゞすまひにも和むべく、ホツと省線にゆられてゐる所だ。雪もよひの新市内は寒かつたが、いま車内へはうすら陽が溶けこんで來た。

今夜は、すきな本を購つて、それから近くへ關東節——浪花節をきくにゆく心算だ。いや來ねんからまた喋るばくだから、他山を勉強にゆくといつてもよい。

木村重松だの、重浦だの、湊家華柳丸だの、廣澤虎造だの——そのうち、虎造丈けは明朗で、千惠藏や今は亡き池谷信三郎の小説のやうなヴァイオレットいろ味覺だが、とにかく、あとの名人たちは煙し銀で、やくざで、巷にかゝる弦月かとどめあへなき鳴咽と云つた風な——すべて下直なところがよろしい。

毎ど、云ふことだが、時々、おゝさかへかへり度くなり乍ら、つひ浪花節丈けは、この關東の、うらぶれた悲哀感にいくちなく賛同を強ひられて了ふ。——だから、今夜「ふし」をきけると云ふことは、のちの日凶い年の最後に唯一つの佳きおもひではななでせう。

× いま代々木——少しこんで来た。が、
坐つてゐる自分は、ぐんぐんこの小文が
かきつゞけてゆかれる。

× 來ねんは、七八年ぶりで、洋服にしや
うとおもつてゐる。

黒い——真黒いやつで、ネクタイ丈け
ちよつと華美で、ベレー帽は暗緑で……
この引才のハナシカ仕立の戯作者は、
これでいろ／＼の空想をあへてしてゐる
シガレットの煙りの行末に、モヤ／＼
と妄想を追つてゐるのだ。

こんなことは元より自分のことである
——が、自分丈けのことつてやつとも、ソ
ートーにいうではアリマセンか。

× ——車窓からみると、どこの家にも松
が立つてゐる。
飯田橋だ。神田川の水はぬくたれてゐ
る。

右にみゆるは富坂か、左は小日向水道
べり、落ちゆく先は神田川、いつしか來
かゝる壹岐殿阪……。

又しても關東節のこんな「祐天吉松」の
文句をおもふ。吉松が、我が子逢ひたさ

に本郷へゆき、加賀屋の鑿殺に愕くとこ
ろだ。

所でその「いきどの阪」は、子供のじぶ
ん、江戸の人たちは「ゆきどの阪」と訛つ
てゐた。

そんな江戸訛りに、自分は、いくたり
かの暗い傳統に明滅していつた、年老ひ
た肉親たちを可成の實感でよくかんがへ
てみる。

……と、こゝで神田。自分は省線です
てさせて貰ふ（こゝまでゆきの省線にて）

……銀座、日本橋——

みんな寝くたれた堀割の水であつた。

あの鈍く淀んだ年の瀬の水のかんじ……

さらに、そこへおかざりの松を積んだ船
の、もやつてゐるかんじを、むかし、徳

富蘆花で自分はしみ／＼よんだとおもふ
未だ、午後一時ころなので、ほしみせ

の古道具屋も古本屋も、銀座では完全で
なかつた。

先日から目をつけてゐる芳年のガラス
繪の美人が、一軒、古道具屋にブラ下つ
てゐたが、別に、値をきく心もちにもな
れなかつた。

丸ビルへゆけば琉球焼の猫があるはず

で、愛猫家の自分は好もしくおもつたが
これもわざ／＼は時間が少しゆるさない

それには何となく來にと云つても、二
三の新聞社、雑誌社へよつたりしたので

ほんとうの漫歩の心もちがいぢ／＼しく
減少し、豫期しなかつたはど、やはりき

のふ迄の延長であわたとしさが胸ぬちに
泡のごとく去來してくるので、有樂町の

ガードちかく、「九州酒」の家へ入つて、
二合ほど傾けた。が——それも謂はうな

らこのゲンコーがした／＼められるほどの
酔である。

……即ち、些か興味錯然としたので、
かへりの省線にさつさとのつて、高圓寺

まで、これをした／＼む。
(即ちかへりの省線にて)——終

恐縮覺え帳

不朽洞主人と蒼々亭楽匠をかたる

住田亂耽

路郎氏の句に

時雨れてる銀座に龜屋鶴五郎

といふのがあるが、私は雑誌に發表され
る以前、氏にこの句ある事をきいて、戲
曲的味ひ深きうちに、いふし銀の風格さ

へも句の魅力に少からず心を打たれた。

その後、或る機會で路郎氏にあつて「しぐれてるざんざにつるやかめごろうーいゝですなあ」と絶讃を呈した所が、たちまち「龜屋鶴五郎やがなあ」と眼鏡の底から微笑の眼で、僕の粗忽さを訂正せられて恐れ入つたことがある。

こんな恐縮事件も印象の中に深く刻みつけられてゐるのが、僕にはこの句が忘れられない愛誦吟の一つである。

徳富蘇峯氏の文章（大毎夕刊紙上）に「古人も絢爛の極、よく平淡に達すというてゐるが云々」とあるのをみたが、路郎氏の近來の句にもこの言葉はそのまゝあてはまるのではないかと若輩僭越ながら考へてゐる。

十日戎兩手でうける氣で出かけ 路郎
煙突の横とは初日 哀れなり 同

これ等の句會吟の披講をきいてゐても實に汲めども盡きぬ平淡の滋味がある。絢爛は若さであり、平淡は円熟された境地のものでなければならぬ。絢爛時代に在る作家が平淡に走り、平淡時代にある作家が絢爛を追ふことは、何れにも無理がある。

路郎氏の句にかつての尖鋭さを求める人もあるが、僕は益々平淡の滋味を氏に望むや切である。

○

三太郎氏にこの正月東京であつた時、いさゝかならぬ氏のスタウトの酔の口から、所謂かん／＼がく／＼の辯のとばかりが、僕へも飛んで來て「君は何故時事吟ばかりつくるんだい。時事吟ならもつと外にうまい作家が居るよ。君の時事吟はよしした方がいゝなあ。僕は君の句は毎月見てるぜ。荒木さんの髯——ありや何だい。第一君は荒木さんの髯を知つてゐるのかい」と壓倒的に言はれたのである。僕はこの言葉に殊の外驚かされた。

問題の中心は、賀狀に刷つた拙句
荒木さんの髯へあらたな年が来る

といふのであるが、成程僕はまだ今をときめく陸相に勿論親しく會つた事はないから、現在國民の常識にさへなつてゐる所の髯の實物そのものは見た事がないわけで、三太郎氏にこう詰めよられると大きな顔をして、然もその時素面の僕が知つてますと、眞面目くさつて返答も出

來なかつた。僕は常々時事吟をものしやうと意識して作句した事はないし「荒木さんの句」にしても勿論そんな意識のもとには作句しなかつたのである。だから三太郎氏の唐突なる「僕の時事吟」に對する抗辨には全くおどろかされたのである。然しとまれ僕の句に何時も眼を通して下つてゐて「下手な時事吟はよせと眞向から言つて呉れる三太郎氏の心底を僕としてその時どれ程嬉しく思つた事であらうか。

三太郎氏を初めて知つたのは、もう七八年も前の話になるであらう。難波新地の万よし居へ、その頃大阪住ひの迷亭氏と連れ立つて來られて、居合はせた縁で万よし氏と共に案内役として、不朽洞を訪れたのが恐らく僕と三太郎氏との初對面だつたらう。僕はまだ金釧の制服時代で、白鶴の一升瓶を片手に提げてお供したものだ。南海電車へさしこんで來る夕陽に透いて見える一升瓶を眺めて「こいつはいゝなあ」と、こぼつと頬を落して満悦の笑を洩らしたあの時の蒼々亭のブ

ロファイルは今でもまぎ／＼と僕の眼底に残つてゐる。

それから昨年十月、本社東京句會の爲に上京して、さる所で、氏と一盞共にした時、僕が酒藏に狸が灯をともし話や、その他色々酒所灘の話をしたが、エビスビールの泡の中から「君は何故そんな所をかつないで、モダンなものばかりかくんだい」この時も叱られた形であつた。「僕とモダン」といふ語も僕自身は何んとも陳腐なものから逃れやうとは努めてゐてもモダンを心がけることはしないつもりでゐるのだが、三太郎氏の眼には僕のものがモッンに映るらしい「酒所灘の話」の原稿も出来てゐるのだが、もし三太郎氏によまれて「君はやはりモダンなものの方がましだ。酒所の話なんかよしたまへ」と言はれるであらう事をひたすら怖れて、實は推敲に推敲を重ねて未だ發表しないのである。

とにかく、地を遠く離れてゐて、色々僕を叱咤鞭撻してくれる蒼々亭宗匠をも

つ事を僕自身萬軍の兵を得るよりも心強いものと思ひ、常々感謝の念を東の空へ向つて捧げてゐるのである。

無 題

水 谷 鮎 美

あなたの言葉を信じてゐる私があなたから嘲笑されるとはおもひませんでしたよろしい闘ひまじやうあなたとぢやありませんよ思ひ違ひをせないでください。まだあなたを信じきつてゐる私なのですひとつのビンのころろになつてくだされませんかひとつの押ピンがなかつたらどんなですかね、釘止めですか（なんだかがちやんときますね）糊づけですかね（お伽餅のようではありませんかね）……だがしかしピンからキリまであるビンのころろぢやありませんよ。

○ はらから笑ふた喜劇の幕がおりてしまふと観客は脂粉にまみれた傀儡の俳優の巧拙を言ひます、原作者や監督者の苦心

をおもひはしませぬ。

俳優をあたまたから傀儡にしてゐる原作者。原作者に重きをおかぬ観客。観客のメートルな昂奮によふ俳優。何れも純藝術心にすぐれねばなりません。

重い空氣

姫 田 夕 鐘

朝まだきの露を押しのけてひびく花火の音にふと目覺むめて枕許のラヂオのスキツチを入れれば皇太子御降誕のニュースに思はず夜着ながら一個の赤子として襟を正して喜びの波をたゞよはした。

その日の晝過ぎ力ないベルの音に受話機をとれば故郷の姉より父が死去しましたから今夜歸國するやうとの事にあまり突然ではあつたが死の一語に何を問ひ返へすこともなく受話機をかけた。

國をあげて喜びの夜る深い思案で汽船の人となつた。寝ころんだ顔へ丸い窓から澄みきつた月がながれて来る。詩に生きたと申さうか悲しきなにも川柳を忘

れずにゐた

父の死へ月は呼吸してゐる如く見ゆ

翌る朝歸宅したが重い空氣の中で佛に
なりきつてゐる父へとめどもなく涙した急
逝とは云ひながら

もの言はぬのが おかしき 程の父の艶

さていよ／＼湯灌となつて眞心の詩で供
をしたのであつた。

人受けも七十六の佛なる

出棺の時柳友より心をこめた弔電をいた
ゞき今更ながら友情に涙を新らしくさせ
られた。

高齢なれば順序と云ふものゝそのある
ものを超越して掬ひあげた砂が手から抜
けおつる思ひがひしひしとせまるのを覺
えさせられた。

父は非常に按摩が好きであつて丁度そ
の日も朝から按摩をとつてゐた時に號外
で日の御子の御降誕を知りお喜びをした
と同時に安堵の笑みさへ浮べてはつたり
と永眠したのでせめてもの慰みとして家
内の語り草としてゐる次第である。

日の御子に安堵の笑みで父は逝き

日記の一節

「キングの春」

二 南 生

一月二十日 晴(風強し)

「先生まだだつたか」

「まだやねん、えらいねばりよる」

こんな問答が幾度か繰返されて遂にク
イン・ヨシノは今曉覇氣滿々たるプリン
スを安産されたのである。大阪には珍ら
しい昨日の大雪もカラリと晴れて春の兆
を匂はす太陽が「キング」の上空で微笑
みかけてゐる。

林檎の頬を更に輝やかにプリンセス・

スミコは眞先に私をとらへて囁く。

「赤ちゃん出来たんやし」

「エツ！ そいつは目出度い。どつちや
く」

「男の子やねん、とても大きな子やし。
なあお父さん」

「ウンとうく出来よつた。キリ／＼廻
や、昨夜は夜どほしやつたぜ。なんしろ
毎日と朝日へ豫告しといた子が出来たん
やさかいな」

「先生これで合計何人になりまんね」

「九人目やがな。達者なもんやろ」

「よう云はんは」

「今居るのが今日ので六人や。男・女三
對三でうまいことなつとるやろ」

「この一週間は名前に頭をひねらんなり
まへんな」

「名前かいな、わしらインスピレーショ

ンでつけるさかい樂なもんや」

「もうこゝらで「ストゥプ」てな名にし
たらどないだす」

こんな會話が哄笑の渦を捲き起して、
「キング」はいや榮えの春氣に包まれてゐ
る。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ 路郎
壁面の繪行燈には今日の誕生に相應しく
キング・デロウの句が輝いてゐる。



川柳塔

路郎選

楊井二南

すかたんをして了つたが夫なり
借りてゐる傘年内に返しとき
大晦日子は神妙に寝て了ひ
正月を真先に來る隣の子
萬歳を二階で聞いて顔がさし
まつさきに風邪を叱るも母らしき
まどろしい戀だが眞面目くさつてゐ
親にして見れば勝手な戀ばかり
掃いた掃かぬでもめるおんな等

朝田新水

落目な春を宗右衛門町で出逢ひ
金持の手にやりたくはない紙幣だ
寝正月した筈留置場から戻り

厄年と正月からの管を巻く
金言を貼つて會社の暇と聞く
口多き妻へ黙してゐる寒さ
質草を抱えてお辭儀しそびれる
呑み仲間仕事始めを見とゞける
掛取のまゝを競馬の人となり

住田亂耽

寢臺車隣に行司寝てゐたり
鋭角と鈍角牌をたゞかはし

三園神社

書割に出てくる鳥居黄昏れる

雀耶好み河童灰吹きに題す

立膝の河童へあをいシエードの灯
きまぐれさ急遽燕で歸るなり

福助のあたまのつやも松の内
灯の銀座戀の銀座を歩くのみ

阿部 閑生

紋服に褌をかけて勝手へ出
診察を待つ間同病相うとみ
嘘云へぬ男となりて見限られ
淋しさうに飲む日は妻にすゝめられ
事済んで行方も知らぬ金一封
と知らず社長女工に席譲り
待たされて是ならといふ別の嘘

橋本 緑雨

酒の味みはらしもないとこでよし
内風呂で月のあかりが唄になり
お二階の月は淋しいひとりもの
倅せな男の後つきまとひ
外套をしつかり着せた子を連れて

西田 艸樂

五十の色氣櫛が小さい
一人行けばこつそりした間へ案内され
年増まだほんとの酔と見てとらす

荒れた手へ趣味のないのも許しとき
観世音戀には理解あるお顔

吉田 水車

皇子の春

目出度さのつゞく旗日も二年越し
門松はいつそ淋しい姿なり
暮の街君も何やら抱えてゐ
着て塗つてさて何處へ行くつもりです
元日をさびしきものにワントン屋

春元 紀太

春までは此のまゝときめた襟の垢
眞田蟲俺が死んだらどうする氣
戀握る女の指の荒れて行き
惚れ切れぬ弱き資本家の端にゐる

生田 翠夢

日の大皇子御降誕

おゝすめらみこだとラデオが號外が
それだけかと男の聲の冷やかな
夢しばし春の心となりにけり
物な思ひそ椿の花は紅かりき

福田山雨樓

さう聞けば父も蒲團をかぶる癖
大阪にゐて大阪と他人です
よき夫よき父としてぬくい飯
風邪ひいて最短距離を歸るなり
デパートの便所を楚々と拭くおんな

關本雅幽

鮮人の小屋の煙も初東風す
南京豆蜜柑干柿啄木集
家族連れの梅見さびしく眺められ

永田里十九

お元日此子に酒の匂ひとは
世間はせまし馴染ある古い本

○ 喜多春秋

發着に青空がある高架驛
半襟を見る母親の背中に寝
號外だ國旗だ皇子御誕生
新家庭夫の雜誌夫の句
ポーナスへ丸善美津濃高島屋
正月がくるとて人の心かな

姫田夕鐘

人の子のこびる姿に氣をそらし
妻と呼ぶ日の遠からん封をする

父の永眠（三句）

悲しききわみ受話器のしめりたる
もの言はぬのがおかしき程の父の艶
佛の徳へ葬列のつゞくこと

北川あや美

女給もう金の威壓にとろけさう
いけすかぬ客が大事な暇な店
旅に出る知らせが寒い松の内
お元日去年の嘘を思ひ出し
酔ふた眼に彼女は一層美しゆう

大鶴喜由

友人中野氏結婚

花嫁の引かれるだけの道があき
仲居の酒豪を幹事知らなんだ
紳士には相違無之黒あんど
民草の期待きつちり皇子さま

妹尾變人

お雑煮の二杯目からは胡坐なり
泣けば足る子供を抱いて十二月

淋しさの息は一直線に出る
食堂に消えたところまで見られて居

西村明珠

台所二銭で買ふて餘るもの
バンクしたらしくむこさん水をうち
ついて来た人が喋つて部屋をかり
病院の廊下になれて淋します

中澤濁水

明けたなら屹度節酒の松の内
獵銃の肩をすべらす恩師の碑
逃げ隠れしない家賃の滞り

市場没食子

貧はよし親類どもが寄りつかず
大空は曇る偽り多き世や
女の要る女に今は用もなし

石森靜太

元日のベツトに髪がぬけてゐる
首巻がいつそ淋しいわたしです

K子にささぐ

はるあさくやまひをにくむ日記かく

奥野禿山

いきがゝり青春の氣の湧いて出で
萬年筆煙と波を書いて賣れ
子を叱る順番もある寄り世帯

熊谷紅

仕方なく自分が嘘を言ひに出る
髯を見て貸す氣になつた住宅地
虚勢張るソフトラカラーの垢だらけ

越智虹子

O H I N 化學製糸株式會社労働者よ

此の上の屈從をまだする氣かね
養子にはまだ言ふてない借があり
ソーシヤルダンスも出来る未亡人

首藤竹楓

襟卷の中で笑つたとなりの娘
うれしさと淋しさへ来る大晦日
双向へど弟だけの損があり

石丸春峰

ありたけを使ひ果して嫌はれて
玉葱の誰に尋ねて知つた春

水谷 鮎美

質物となり阿彌陀さまころがりぬ
阿彌陀さまお酒の呼吸をふきかける

荒井英賀夫

十二月金一銭が落ちてあり
やけ酒に助けてもろた十二月

芝 四 葉

寂滅の吊辭が僅か二三行

舊友の賀狀に接して

小手ばかり来る君だつた

植山 九天

鳳仙花はちける午後へ子の重み

我が子の初誕生

猩々を誦へば本の上に来る

郊外は宵寝を強いるやうに暮れ

宮岡 白峰

五合でたる正月はだれも来ぬ

一步二步三步主治醫の有難し

松下小柳子

風よ貧乏人はおとなしむだらう

國旗ひらく 僕は制服

村田新市街

十二月こゝが男の見せ場なり

時雨てる女の指の白さ見る

戀もなく宵霧深く女給ゐる

創立記念役者としての金ボタン

平井 春光

某清酒瓶詰工場見學

失職の増える道理をまざく見

某カソリン會社見學

門衛つかくマツチ預りますと云ふ

圓タクはこゝらで折れる天下茶屋

渡邊 曉童

人様の貸しだ借りだの十二月

もうかつた話へバツト消へてゐた

岸上 錦石

昇給を一番先に女給知り

書初めに少しは酒の力あり

後藤 青兒

秋の陽が海に沈めば國思ふ

粒々集

ほころびを父が縫ふてる日は淋し
策略に似合ふた首の銀狐
元日であらうと屑を拾ふ身の

日野華水

緞通の上のほこりを拾ふ妻
罐詰の蓋へ晦日の灯が點り

吉川 嘔人

晝遊び厚司で来るはイロがあり

江戸みつる

また来るに逢へぬが如く女泣き

明石柳次

告げ口の上手な男出世をし

公園を真直ぐ抜けて一人ぼち

ねんねこが似合ふ女となりけり

尼緑之助

見舞客神話に力入れて去に

梶谷巷二

足早な人に霰がつきまとい

長谷川三汀

白足袋落ちてゐる朝の花街

送られた嬉しさもある涙が出

秋ふかき街に娼妓のふところ

手

鎌倉 富士野鞍馬

ちと間のぬけた社線驛長

淡い戀どつちも固い親を持ち

空ッ風髪のうすいを氣にしている

御影 長崎 柳秀

好きな妓の他人行儀のもどかしさ

勤め度い娘心に戀も有り

嘆くまじ子供の有るを思うとき

後から見では淋しいビルと後家

人生觀金と酒との違ひなり

兒の仕打夫にすまぬこと斗り

松山 前田 五健

眞四角に戀人にあふ初年兵

空腹は無いか雀の皆ふくれ

ストープだ毛糸だそれで風邪をひき

理をつけて争ふ果ての空虚なる

桃割ヘタの笑ひでない笑ひ

[illegible]

武玉川初篇研究
(三)

梅
本
秋
の
屋

森東魚

蛭子省二

(620)
橙 一 つ な わ し ろ へ う く

省二 注連繩飾。

秋の屋「なわしろ」は稻種を播く苗代田の事で、注連縄を引廻すけれども、燈を飾ることは無からう。偶然に其處へ燈が一つ浮いたのだと思ふ。

東 魚川多分前説の如くであらう。それで何となく豊年らしい前兆を感じた氣分であらうか。

二『句の読み誤りをしてゐた。「うく」を「うへ」と。

(621) 稻葉の雲の中を鎧持

省二「稻葉のおひととのひたる黒色をいふとぞ」で、稻葉の茂けり重なつてゐるのを、雲に見立てたのである。豊年であ

る。鍵持とは毛見の鍵。「稻の波立つや帆柱毛見の鍵」（曙里）
「刈る跡にむら雲なびく稻葉哉」（紹巴）
秋の屋——雲の一字が如何にも豊穣を聯想される。併し此句の着想は陳腐である。

東魚Ⅱ毛見の句に違ひない。

(622)
降初し日は遠い事五月雨

省二「顔につく潮のしめりや五月雨〔召波〕。ああ、よくも降り続くものだ、指折り數へる。」

秋の屋Ⅱ平板無味。

東魚四、五日でも非常に遠い以前から降つてゐるやうに思はれるといふ處に、穿味があるのであらう。

(623) 町内の月額青き死光

秋の屋「死光」は、所謂死花が咲くと同じ意であらうが、町内の古老が死むで、立派な葬式を行ふ事となり、平素恩顧を受けた人達が、髪月代をして供にたつといふ句である。

東 魚「お説通りに違ひない。死光といふ言葉は見掛けなかつたが、要を得た文字である。」

省二「死跡に金銀を残すべし、之を死光りといふ」(織留)此金がものを云つて、花も咲かせたわけならむ。

(624) 箸の先から見へる光陰

秋の屋「此箸は新年の雑煮をくふ、太箸の事であらう歟。」

東 魚「象牙の箸などが、何時の間にやら減つてくる。そこに過ぎゆく光陰を感じた意に解してゐる。(得て片ちんばにへルものである)」

省二「私は紀念にと、關東大震災以來の用ひてゐるが、幾度削り揃えたらう。」

(625) また主の紋を着て居艸の庵

省二「草の庵に住む身柄となつてしまつても、頂戴した紋付を大切に着てゐる。」

秋の屋「假名手本忠臣蔵の早野勘平氏が、好適例であらう。」

東 魚「頑固な少くも初老をなした人物を想像する。」

(626) 曾我の涙を目黒ても泣

省二「曾我事件でも泣かされ、目黒の比翼塚一件でも泣くと云ふのか。曾我と目黒の關係を明瞭にしたい。」

秋の屋「曾我兄弟の故事と、祐天和尙の幼時の故事とを、對照したものであらう。」

東 魚「曾我の祭は五月二十八日。不動も正五九の二十八日は殊に賑ふ日であるから、その五月二十八日、曾我祭でも兄弟を悼み泣くが、目黒でも不動參詣のついでに立寄つた比翼塚に涙をそそぐと云ふのであらう。」

秋の屋「お説は理屈は通るけれど、少し迂遠であると思ふ。他に正解は無いか。」

省二「鶴の飼育係は、洵にお目出たい結構な役だといふのか。」

(627) めてたい役は鶴の預り

秋の屋「鶴といふ鳥は、祝賀の席に缺く可からざるもので、何處へでも長い頸を出す。年賀の歌俳に、此鶴が居なかつたらば、作者は太に困却する事であらう。」

東 魚「ケイ三に「千年も活る氣て居る鶴の番」がある。恰も此句を説明したやうだと思ふ。」

(628) 氷のうへに外科の挑灯

秋の屋「負傷した者が既に絶命して、冷却した死屍が氷のうに成つた、夫れを外科醫が挑灯でみるのである。」

東 魚「氷」は凍た路の氣分であらう。凍てた路上に醫者の提灯がほかつと影を落した處に一層の身にしむ感がある。」

省二「氷」は四邊の狀景であらう。」

(629) 死ぬと忽人の金藏

秋の屋「生前には吝嗇であつて、藏の中に喰る程金を貯へたが一朝息絶えたと、忽ちにそれが他人の有となる、冥土へ金を持つて往かれぬ。」

東 魚「次の「時枕」の句に關聯してみると興味が深い。」

省二「死は一切空なのだが、金藏まで空になるとは……。」

(630)

肘枕我身代ははなれもの

秋の屋 巨萬の身代とても、一期にして烏有に歸する事もあ
るから、曲肱而枕之、樂亦在共中矣だ、此方が安樂である。

東 魚 富んでるながらも財物に執着のない人物が想はれる
省 二 肘枕趣味の極致か。

(631)

おこりの落ぬうちは丸腰

省 二 おこりは日をきめてくるので、丸腰でゐる。童病と
も稱した「すばらしいのは關取の童病」

秋の屋 患者は武士であるから、出仕もせずに丸腰でゐるの
である。今ではマラリヤ熱といふ。

東 魚 寝の時には双物を身につけぬといふやうな、迷信的
の事であつたやうに思ふが、はつきり記憶がない。

(632)

三ツ櫛のミつれは欠る十二月

省 二 髷櫛、水櫛、梳櫛をいふ、魁花が用ふ。(二ツ列べ
てさすを二ツ櫛又は二枚櫛といつた)「白象にうちのりさうな
二ツ櫛」。物が揃へは缺くる年の暮となる。「二十日過素顏亂
髷文をかき」

秋の屋 漸く工面して三ツ櫛が出来て、嬉しいと思つたのも
束の間、歳暮の遺繰算段に、六一銀行の藏へ入れる事となる、

ああ悲しい哉。
東 魚 ひとつ、ひとつと重ねて調子づけてゐるが、いや味には
聞えぬ。

(633)

菊畑他人の藏の雨雫

省 二 隣家と自家の貧富の對照、猫額大の菊畑ならむが以
て天下の樂しみとなす。

秋の屋 所謂、菊花之隱逸者で、此菊造りは市中の隠士であ
る。

東 魚 他人の藏を羨む心はなく、美事に咲せた菊を、寧ろ
誇る心持ちが仄めかされてゐる。

(634)

寒聲も何そに腹の立た時

省 二 腹立まざれば又格別な聲。
秋の屋 此寒聲は、寒中に唄を歌ふのであらうが、又、癪癪
聲とも思はれる。

東 魚 何か腹の立つた時には、思切り張つて寒聲の稽古が
出来る。怒つたお蔭でセイ一杯の稽古が出来たと云ふ意であら
う。

(635)

凱陣濟んで後家の捨賣

省 二 昔も今も戦争後に、暫く此社會現象あり。捨賣は氣
の毒な言葉だ。「前九年後家にせぬのが土産なり」などは双方
満足。

秋の屋 昔西洋では、奴隸として賣賣された事すら有る。
東 魚 捨賣にする程の澤山な後家が出来たとだけの意であ
らう。

(636)

息て重りを付る羽子のこと

省 二 羽子をひろげ、息をかけて形を直してはつく。眞直
に下りくるから、重りを付けたようであらう。——「剃刀に
羽の子程の息を懸け」(ム三)参考。

秋の屋 現今でも幼女等は、斯る事を爲すのである。
東 魚 息をかけてナリを直す。羽根が好い調子に横になら
ず、珠を眞下にして揚り下りする。重りをつけると面白く云つ
たものだ。

(637) ゆめの世なから人の寢道工

省 二 例ばお妾などは人の寢道具であると云つてよからう
「法眼の差圖で枕一つへり」の枕は、正しく寢道具を意味する
あらう。

秋の屋 二 「人の寢道工」は「人は寢道工」である。世の中に寢
る程樂はなかりけりて、人間一生の半分は寢道具かも知れぬ。

東 魚 二 人は夢の如くだと云ふものの、人の夢を結ぶ道具
にされるとは如何にも儚ない事であると、遊女などの心を詠ん
だものと考へらる。

(638) 顔を見て居る琵琶の始

省 二 平家びわは聽手を眠らせるのが、名手だといふ古句
がある。が最初は聽手と盲法師の顔を見つめつゝ語り出す興味
にそゝられる。

秋の屋 二 痘痕の數まで計へられる。

東 魚 二 緊張して聞く氣になれば、遂に先方の顔をしげく
と見るやうになる。琵琶の盲法師はみられるとも知らず弾じか
ける。見えぬ人の顔を見てゐる處に、此句の覗み所があると思
ふ。

(639) 敷金の禮も言たき新まくら

省 二 敷金は持參金の謂。「敷金に連理の枝は作り付け」
ム十一。

秋の屋 二 上の句ば忘れたが、「夫を尻に敷金の妻」といふ狂歌
があつて、此れは「しきがね」と訓み、簀又は嫁の持參金をいふ
東 魚 二 可笑味がわざとらしくなく認められる。敷金の御教
示を謝す。

(640) 玉手箱仕廻ふ時には皺たらけ

省 二 「眞顔になつて浦島くやしがり」だ。

秋の屋 二 須憐半死白頭翁である。

東 魚 二 「仕廻ふ時には放出し」などもある。浦島は勝
負と云ふと白くなり」も面白い。

(641) 九年の陣へ見舞ふ女房

省 二 前九年の陣、九年といへば、緋絨も柿色になるとい
ふから、女房も見舞に出掛けたかもしれぬ。

秋の屋 二 陣中に夫を訪ふ妻、貞に以て貞に非ず。

東 魚 二 生死の知れぬ夫を尋ねてくる。通信機關の完備して
ゐない時代には、全く焦慮した事であらう。

(642) 厩て尻を叩く仲人

省 二 氣輕な仲人振り。吉日にはチエツク、マークを付け
て置く。「厩にて尻を叩くと間はなし」

秋の屋 二 尻を叩かれても更に痛くなし。

東 魚 二 朗かである。

(643) 水干をのれんに掛る八重葎

省 二 八重葎しげれる宿の目印に、水干を掛けて置くのか
秋の屋 二 祇王の如き白拍子が世をさけて、八百葎の生茂る草
庵に棲み、昨日まで着た舞衣の水干を、出入口に懸る暖簾の代
りにするので、目印にするのではない。先づ嵯峨野の庵室とみ
てよい句で、白拍子は動かぬ處だと思ふ。

東 魚 二 嵯峨野説に賛成。

(644) 結納の濟んだ迄の我せこ

省二 世こは兄子(兄は親密の意)。此時が嬉しいもの。

秋の屋 これが現代であるなれば、窃に寫眞を把出し、夫れをみてはは笑む處である。

東 魚 我せこ言葉に對して、全體の調子が、そぐはない感がある。

(645) 寝てか覺てか民の前帶

省二 民の前帶とは。

秋の屋 寝てか覺てかといふと、此後に「夢か現か」といふ可きであるが、「民の前帶」の解釋に苦しむ。或は寡婦を咏むだ句歟。

東 魚 難解。

(646) 枇杷柸花の寒を言ひ合

省二 枇杷の花も柸の花も俳諧では、冬之都に入れてある寂しそうな花だ。「寒い日に急度がましや枇杷の花」(惓然)。

「ふれみそれ柸の花の七日市」(其角)。

秋の屋 「言ひ合」は「いひあはせ」と讀むの歟。枇杷も柸も共に白色で、看る影も無い閑寂の花である。

東 魚 十四字によむので「言ひ合ふ」。柸花でヒヒラキと單に讀ますつもりであらう。言合せたやうに、似よつた忙しい花が咲く、之も冬の氣分であると云ふ心持と思ふ。

(647) 不足を隠す嫺の白粉

省二 世の中に、お白粉がなかつたなら、かなり不足な顔の持主も多からう。

秋の屋 三評通りかねる雀斑も、目の下の泣黒子も、巧にぬり隠せるのである。

東 魚 私ほもつと充分にぬりたいが、姑がうるさいから、

不足ながら適當にして、満足した顔であると云ふ風に考へてゐた。前説だと嫁でなくてもいゝやうに思はれる。(勿論嫁で意味合ひは受取るけれど)

(643) 立身をしてかるい履物

省二 輕いとは、上等なものと履こうし、又馬や乗物となつて、土つくも少なくなる。

秋の屋 立身出世して馬駕籠に乗るやうになれば、下駄などに用は無く、草履のみで事が済む。

東 魚 現今なら自動車から、ゆつたりとフェルト草履で現はれる處だ。

(649) 夜着や枕は戀の下押

省二 戀の下草となる、夜着や枕は美ましがられてもよからう。

秋の屋 戀の下草となるのは宜いが、痴話の果に投出される事もある。

東 魚 髪のはつれはときては、罪な下草である。戀の下草はうまい文句を考へたものだと思う。

(650) 哥ぬす人は大からな人

省二 何人かを引張り出さぬと、解釋が出来ぬ氣がする、思當らず。(双紙洗ふ町の黒主には、こんな句がある。)

「歌の白浪浮草の根なしごと」

秋の屋 「大がらな人」は、大伴黒主の大を利かせたのかも知れぬが、謡曲の「草紙洗小町」では、黒主は歌盜人では無いのである。

東 魚 歌よみなどは、どうも六尺ゆたかの大兵では、ふさはしく思はれない。「大がらな人」で何となしに、鈍な人物が想

像される。

(651) あたつて錢の戻る三絛

省二 お杉お玉の三絛であらう。

秋の屋 此句は合の山のお杉お玉に相違ないが、昔の大名邸の表具屋に住む勤番侍は、其窓下を通る女太夫を呼んで、錢を擲つたものだ云ふ。

東 魚 贊、戻るは少しく表現が鈍いやうに思ふ。

(652) 伊達過て小町はもため緋縮緬

省二 緋縮緬は怖ろしいものとされてゐる。小町に於ては、
そういふものゝ必要あるなしだ。

秋の屋 緋の脚布は締めぬが、緋の袴を穿いて、多くの男達を惱殺したのは、一層罪が深いと思ふ。

東 魚 奇抜な趣向だ。伊達過ては小町にかゝるのか、緋縮緬にかゝるのか一寸迷はされる。意味からは緋縮緬が伊達過ぎると云ふのであらう。

(653) 神樂のうらへ廻るさむらい

秋の屋 新五左などが神樂堂の裏へ廻り、美貌の巫女に對して、談判を開始するの歟。

東 魚 或は巫女の情夫になつてゐる、御家人などか。
省二 巫女は問題の女なのだから、其へんであらう。

(654) 葬禮の翌へ延て欲かしれ

秋の屋 葬禮の翌日へ、何を延すのである歟。形見分でもないやうである。

東 魚 捨假名がないので一寸困る。「あしたへ延びて」「あすへ延はして」か。いづれにしても大きい違ひはない。「翌へ

延ばして葬禮の欲がしれ」と直してみて、解せられるやうに思ふ。同じ葬式を出すなら、例へば佛滅といふ日が翌日だからさうしやう、「欲」を軽く日を撰む位にみたい。

省二 私も日取りで、友引などを忌むからならんと考へてゐたが、早く出す方なら、欲が頗る適切なのだ。

(655) 星ニツ三ツ雨もりの伊達

省二 雨がもる、そこから星ニツ三ツ眺め得る。風流も苦しい。

秋の屋 清貧を賣物にする、似而非風流人の所爲であらう。

東 魚 雨もりで閉口する代りには、座して星をみられる風流がある。全くえせ風流者流である。

(656) 傾城の遠い思案も遠からず

省二 傾城の遠き慮といつた處で、紋日や年の暮の思案とすれば、光陰矢の如く、どん／＼やつて来る。

秋の屋 傾城の賢なるは、必ず遠き慮り有り。
東 魚 蛭子氏説の如くであると思ふ。

(657) うそ兀て後合に夜か明

秋の屋 遊女と嫖客が、互に嘘を突合ひ、夫れが兀けて氣まづくなり、春中合せに寝たまま、遂に夜が明けたのである。

東 魚 「うそ兀て」はあまりに單純な、説明的の文字で面白く思はれない。

省二 いやはや物好きな話だ。

ペンダコに聞けば拔擢されません

金★銀★鐵

評

月

二 南・艸 樂
水 車・山 雨 樓

近作柳樽より

裸婦の像淋しき腹をしてるなり

春 水

二南——此の像は彫刻でも繪畫でもあり得

やう。裸婦の腹に淋しさを感じた作者の目に特異を認める。凡そ美術品の鑑賞には色彩、形態、感情の三つを探られねばならぬ。

前二者は誰の網膜にも等しく映るであらうが、感情は人により區々である。或者は裸婦の顔に暗さを感じ、或者はその足に若さを感じるかも知れない。それは鑑賞者の誰にも許された自由であらねばならない而も必要なことは、鑑賞者が各その受感を發表する自信を持たれば、らぬことである。此の句の作者は裸婦の像から探り得た感情を「淋しき腹」と大膽に卒直に發表し

てゐるのがうれしい。

艸樂——そうです。大膽に卒直に發表してゐる。そして、満たされぬ慾望を感じてゐる。

山雨樓——満たされぬ慾望とは？

艸樂——腹の恰好をも少しかうもありたいがといったものです。

山雨樓——それはしかし裸婦の彫刻（假に彫刻と見て）に對する藝術製賞ではなくて彫刻に對する素人の持つ感じだらうと思ふれ。それはそれでいい、僕はこの句から日本人が裸體に對して審美眼に乏しく、裸像を見て、何となくすぐつたい氣持に襲はれ、その腹に屈辱を覺ゆるやうな氣分になるこゝを見出してゐるものと思ふ。日本人通有な感情を表現してゐるとも云へやうだがさう云ふ觀點からすればこの句サト皮相であり野人めいてゐるやうでもある

艸樂——指にペンダコを生じ、額に汗して其日の勞働に尻を叩かれてゐる階級人には、拔擢は愚か、明日の藏が氣にかゝる社會相の中に、拔擢されぬ位の不平はまだしもと云へる。かうした心境にあつて軽いユーモアを現はした句だけに深刻味はないが、うなづける句ではある。擬人法はありふれてゐる。

二南——今の社會相は下積階級の者をして卑屈にまで謙讓せしめ様とゝゐるものだ。必要以上に自己の價値を劣視して謙遜しやうとする人々の群である。そうした心境にあつて軽いあきらめと不平を交錯してゐるのが此の句である。要するに自己揶揄として軽いユーモアを味得して、差支ないと云ひ得る。

山雨樓——ありふれた擬人法だとしてこの句の叙法を批難したくない。拔擢と云ふ生硬な言葉を上五が巧みに具象化してゐると思ふ。物軟らかな口語體であることが語感を弱めた結果になつてゐるが、觀點は相當確かであり、漫畫にならない川柳の一面を示した句であるとも見られる。漫畫にならぬと云ふよりが漫畫に弄ばれない、そし

て歌、俳の表現し得ない特異な持味がある
點に於て恰好な引例句となるであらう。

爪を切るひまを主人に見すえられ

吉 左 右

水車——一種の心理描寫。賞罰が明かにす
ると云ふがこれは又苛酷な眼ではある。全
體として既に非凡。

二南——使はれる身の悲哀を物語る句。常
に光る雇傭者の眼に絶えず おづ／＼せれ
ばならぬ淋しさ、悲しさ、そして遂には反
感さへ誘發するであらう。下五よくその束
縛感を捉へてゐる。

山雨樓——水車君は非凡と評してゐるが、
事實は寧ろ平凡な日常を捉えたもので、そ
こを見逃がさなかつた作者の 眼に鋭いも
のがあると思ふ。僕はこの句から主人の苛
酷な眼、云ふよりか商賣に 血眼な顔を見
出す。主人の心持に同情するやうな氣持で
眺めて一層の味があるやうに思ふ。

艸樂——店員の二人三人を使つてゐる自分
には此の句に教へられるものがある。山雨
樓氏の評が又うれしい。

眼ざはなの戀へ神様ひどい です

岩 石

山雨樓——眼と鼻とは近くに住んでゐる(或

は同じ所に勤めてゐる)二人のこと。戀を
裏切られ、又は阻まれた場合の怨嗟の聲と
思ふ。真剣な戀に對して諧謔を交へた口語
體がすばらしいユーモアを生んでゐる。定
型律も斯う云ふ叙法を選ばれると 自由無
碍だ。

艸樂——ユーモアよりも、怨嗟の聲に打た
れる。それは此の句を諧謔を交へたものと
見ない時一層切なものを覺ゆる。

二南——私もユーモアは受けとれない。假
令作者がユーモアを意識してゐるとして
も此の口語體が持つ怨嗟の力に 壓倒され
てその影をひそめて了つてゐはしないか
と思ふ。此の點艸樂氏の説に賛成して憚ら
ない。

ラグビーの一團冬を握きませる

尖 衛 子

山雨樓——一つのスケッチではあるけれど
も、うまく捉えてゐる。所謂川柳の妙味を
覺える句。だが斯うした見方ばかりに心を
奪はれることは感心出来ぬ。

艸樂——叙法は面白いと思ふ。だがそれだ
けが此の句の生命ではなからうか。

二南——ワインタースポーツ隨一のラグビ
ーの混亂と粗暴を「握きませる」と表現し
て作者は我が意を得たりとしてゐる様に

見える。大方の讀者も「成程うまいこと云
つてあるなあ」と手を打つであらう。思ひ
つきの句として大衆向であるが、私はこれ
以上に深入りせぬことを 作者に望み度
い何故なれば迎合句は得てして 遊戲に賴り
易いからである。

病 氣 じ て

なに休なくおし入れあけてどうする氣

英 彦

二南——明珠氏の令息(十才)の句である。
此の少年作家は以前にも「病めんへ行つて
なみだの天と地と」の佳句を見せて吾人を
驚ろかしたことを忘れない。此の句、病床
の無聊と寂寥を把握して餘さない 點を買
ふ。構想、表現共に大人臭しの譏りは免れ
ないかも知れぬが句力には關係しない。此
の句で思ひ出すのは路郎師の舊作「二階を
下りてどこへ行く身ぞ」である。

山雨樓——聞けば英彦君の句は父君も知ら
ぬ間に投句されるとかで、勿論添削も改作
もないさうである。實に末頼母しい天才兒
だ。そして母様のもも代さんも川柳家であ
るから、左様に恵まれた環境にある同君の
將來が期待されてならない。評は二南君に
賛成。

艸樂——十才の少年の句と思へぬ佳句であ
る事に敬服する。

此の家も彼のの家も犬文化村

青 兒

山雨樓——動物愛又は實用以外の必要に依つて飼はれた犬であると思ふことに、おいて、この句の皮肉味がヒリツとこたへる。叙法が巧みに結ばれて、快感帯の上を走つてゐる。

二南——此の犬は裝飾の犬であり、流行の犬であり、又競争の犬でもある。私「皮肉味までとはいかないが文化村の有閑的雰圍氣を此の句から吸収し得た。

艸樂——強ち裝飾的とか、實用以外とかにも見えない。同時に文化村のまばらな家並が想像されて来るが、ごちらかと云へば皮肉味が勝つてゐる事は争はれない。

望みない子のやせ腕まちつと握る

阿 古

水車——いたましき死別でもあらうか、其處迄は考へまい。僕も逆に此種肉親愛の現實を接した。すきのない句である。全體に漲る悲愴を感じが胸に迫る。

山雨樓——この句の事實感の前には襟を正さざるを得ない。批判や検討を許さない心境が吐露されてゐる(例へば甲句に對するやうな)しかし視角を變へてこの句の表現力を考へて見ると、「ちつと握る」にだれた

ところがある。それはあながち五、七、五の座五が一音字はみ出でゐるだけでなく言葉そのものに冗慢さがあるやうだ。と云つて「握り締め」なぞとして平凡に了つてしまふ。結局「ちつと握る」に或る意味がこもつてゐるのだが、叙法上の不満は否定出来ない。

二南——悲惨な餘りに悲惨な句の姿であることよ。句を構成する文字總べてが含涙的で讀者の胸に迫るものは「悲」の一字に盡く。私の知る所では夢遊氏の「藥瓶熱のある手に轉がされ」があるが、切實性から言つて到底提出句の比ではあるまい。又此の月の川柳塔靜太氏の句「美しいそらに死にたくなつてきた」に冷水三斗の感を久しうした。山雨樓氏の叙法上の不満に就いては私も同意である。

艸樂——叙法は止むを得ない。初心の間は握る下に母とか父とかを使ひたがる。併し此の句のまゝが一層深刻でよい。

川柳塔より

出羽ヶ嶽物理を知らぬ顔で負け

濁 水

二南——出羽ヶ嶽と云ふ特異人物をヒロシとする喜劇である。たぐらまぬ滑稽即ち決して強ひやうとはしない。おかし味であ

ることに氣がつく。力学がどうであらうと運動の法則がどうであらうと此のヒロシにとつては凡そ無關係である。只兎に角負けたと云ふ觀念しか感受してゐない。従つてその顔のなんとぶつきらぼうなことよ。その何の理屈も介在せしめない點に坐る笑を誘はれずには居られない。路郎師は最近滑稽句の漸減を歎いて居られたが、こんな句がもつと頻繁に作られ、作るべき苦ではないかと思ふ。蛇足だが此の句が断じて「大男總身に智慧が廻りかれ」と同類視せらるべきでないことを警告して置く。

山雨樓——「物理を知らぬ顔」としたところに句の巧みさと云ふ滑稽感を助けてゐる。「知らぬ顔」とか「知らぬ型」とかしたのでは物足らぬところであつた。負けたときの彼の顔の無表情が、觀客に對して滑稽の底を流るゝ悲哀をそゝる。悲哀を塗りつぶした滑稽である。

艸樂——出羽ヶ嶽の體格そのものが凡そ力学的不均衡あり、そう言つた點からこの黒星の多い彼氏に負けた事を句にしてもエーモアは感じられない處だが、此の句のエーモアは素晴らしい。

意地といふものに命をおとしかけ

春 光

艸樂——危なき人生なるかな。こゝに氣の



川柳天神縁起 (二)

藤里好古

(二) 元 服

道眞の幼名は吉祥丸と云ひ、人は阿呼と呼んで居つたのだ。嘉祥二年、五歳の春を近へた彼は、庭上の梅花を眺めて、

梅の花、べにの色にも似たる哉

阿呼が顔にも、つくべかりけり

の一首を詠じて、俊秀を認められ。文章生嶋田忠臣（字名を田口達晋と云ふ）に師事して勉學す。齊衡二年、十一歳の春亦、梅花を眺めて、

月の耀くは晴れたる雪の如く、梅の花は照りたる星に似たり。憐むべし金鏡（月の事）の轉じて。庭上の玉房（梅花の事）のかんばしきを。

との五言絶句一詩を賦して人々を驚かし

た。のみならず十四歳（天安二年）の十二月、「臘月獨興」なる七言律詩を賦したりして、いよく天才の閃きを認めしめたくくして、貞觀元年、道眞十五歳となりて元服加冠した。此際に始めて「道眞」と名乗つたのであるが、烏帽子親の名乗の一字を貰つて名乗を定める慣例であるから、誰れか烏帽子親があつたのだらうが、當年の模様が傳つては居らない。大

いした式でもなかつたらうと思はれる。さはれ、親達の喜びは大きかつた。生母

伴氏は道眞の將來を祝つて、

久かたの月の桂もおるばかり

つく事が川柳人の餘得である。句は平易なれどもよきものを擷んでゐる。

山雨樓——作者は運轉手の免狀を持つてゐる。實感の句だと思ふ。そしてそれとなく人生の或る斷片をカットしてゐる。句體が作者の物語り乃至告白のやうであるが、客觀體に見られぬこともない。只句想において警句的又戒めの言葉に似た物ざしがちらめいてはゐるが……

二南——異説なし

いちゝかな儲けに善人うろたへて

八 步

山雨樓——八歩君が商人であるところにこの句の眞實性と、其の上の面白味を覺えるこの善人は商賈の経験淺き隣人（同君の）であらうが、初な人間味が漂つてゐる。儲けにの「に」はない方が調子が延びなくいいと思ふ。

二南——「うろたへて」は面白い。「うろたへる」でなしにてとしたのは更に此の句をよくしてゐる。句の味は山雨樓氏の説に同感であるが儲けにの「に」を除くとこはさうかと思ふ。句の回聯上私は寧ろこを入れることにより安當性を認める。その爲には調子延びの謗は甘受してよいと思ふ。けこ——善人とあれば隣人と解され、又少し口錢を取り過ぎたとか、商人の方便を使ひ過ぎた場合の自身の實感をも見られはせまいか。

家の風をもふかせてしがな。
と詠じた。父親の心境はまさに

悴にはかなひませぬと是善卿
悴にお問ひなされと是善卿

で、人々に誇つて居つたであらう。かくして、同四年四月、十八歳にして「文章生」となり。大學寮に出仕し、同八年二月釋奠に經書を購じ。其年十二月には、「顯戒論序」を草し、文名いよ／＼高く、翌年「文章得業生」となり、正六位下下野權少掾となつた。同十四年母伴氏薨じ元慶四年二月に是善卿も他界した。此時道眞は式部少輔と文章博士とを兼任して居たのである。

(三) 天國の太刀

大阪府南河内郡古市町、府社譽田神社の寶庫に秘藏されて居る。國寶「譽田宗廣經起」の下巻に、道眞が同宮に參籠して、八幡神より神劍を授與されたりと傳ふ。同緣起の詞書に曰く、

菅丞相は、人皇五十八代の御門、光孝天皇の御宇、仁和二年丙午四月十四日に、河内國道明寺より一夏參詣、七月十四日の夜、社檀の御戸をおしひらき

て、十五六歳許なる童子一人出來て、手に寶劍をもちて示して曰く、人の國より我國人の人より我人と、託宣おはりて、寶劍を丞相にさづけ給、仁和二年光孝の宣旨を受けて、讃岐國司に任せられたり。寶劍は、いまに安樂寺にあり。云々。

と、文中「寶劍はいまに安樂寺にあり」と云ふは、筑前太宰府なる天原山安樂寺にして、今の官幣中社太宰府神社の前身である。同社の寶庫には此神劍と傳ふるものあり。そは道眞が常に座右に置きしと云ふ、「天國の太刀」とす。此太刀を抜き放つ時は雨を呼ぶとの傳説あり。

天國が出て干し物を取り込ませ

とは是を云ふのである。其太刀は銘刀かと云ふに、さにあらず、公卿が帶する處の衛府太刀で中身は凡作である。僕の管見に依れば、此太刀を傳來する神社は東京の龜戶神社、大阪の天滿宮、京都の北野神社、等にも存して、凡そ天滿宮と名の附いた、相當古い神社は寶物として大概藏してゐる。

「三代實錄」、「公卿補任」、「政事要略」



江戸のうはさ

▲きさらぎの江戸の空をはるかに翫びつゝそこはかとなくあつまつたうはさはなにかき綴つてみやう。

▲坊野壽山氏、初刷として「第三花柳吟壽山調」上梓さる。三百部限定印行で、こいきな心うれしき小冊子である。

▲東京の各吟社句座では、選者にその勞を謝する意味で粗品を呈することになつてゐる。

我々の輩を敬する意味でも、之はよき事であると思ふ。

きやり句座では、選者室が別にしつらへてあつたが、之も選の能率を上げ、よりよき選をする爲に喜ばしき現象であると思つた。

▲きやり句座の席上、「瞭火」「芥子粒」おもひで」の諸雜誌を戴いた外、川柳研究、弘福寺句會、等の句會案内ビラを澤山貰つて、江戸柳界の隆盛をひそかに祝福した。

▲五日の隅田川七福神詣は、手宮會主催で賑々しく催された。

同會盟主、通稱「小島町」或ひは圓滑洒脱なトキキ的好川柳家杜若さんを中心として一同樂しく三々五々打ちつれだつて多聞寺をふり出しに、百花園で小憩の後、三めぐりを最後に「藤助」で一盡かたむけて今日の雜感「迷亭選拔講のち目出度く福詣でを終る」(參會者)杜若、太郎丸、空靈、迷亭、玉兔朗、亂歌、雨後亭、宵五、寛延、真砂、陣居章五、壽山等であつた。

の記載に依れば、道眞が讃岐守に任ぜられたのは、仁和二年正月十六日であつて二月に饒別の宴を披き、三月中旬に京を出て、四月七日に讃岐國府の官舎に到着してゐる。故に、四月十四日や七月十四日に河内國に與太つてゐる譯けはないのである。譽田宗廣縁起は鎌倉時代に作製されたものであるから、菅神信仰の初期に流仰した龍神としての信仰から（綱敷天神の段に「細すべし」與太ばつちを書いたものだつた。それを坊主神主が、さも實錄らしく、其名も「天國の太刀」と泥つち上げたのである。

事實、鞘走れば雨を呼ぶ靈劍を、道眞

※前句附迷亭選の披講に、ひとゝき、あのウルサがた的聲帯に江戸をひしゝ感じた事であつた。特に迷亭氏の肉體自體が「ちんまりとするゝ」なる題にまことにふさわしきものであつた事を、ひとり心おかしと思つた向は、相撲三分間吟は、正月のおなぐさみとして、興行價値百パーセントであつた。行司は杜若、玉兎朗、陣居で、彌次も少く、物入りもないあまりにも靜かな國技館風景であつた。

が座右に帶せしならば、讃岐守在任中大旱害に臨みて、其靈劍を抜き放ちて、慈雨を求めざりし。彼は仁和四年の大旱に當りて、五月六日、齋戒沐浴し、幣帛を捧げて阿野城山神社に、祈雨せるにはあらざるや……。

——今回は、百人一首の「手向山」の歌の故事と、「左近」の模様を説く——（昭和九年、一月七日、三原山へ出發に臨みて稿す）

前回「誕生」の項へ入れる左の二句を落して居ましたから、追加します。

是は善い子だと梅の枝を分け
御乳の人急に尋ねる是善卿

▲僕の初旅を、ころよく迎へてくれた東念寺では、早速和尚を初め、東念寺夫人、迷亭、茶六、たかなの諸氏と共に牌三昧に没りしてくれた。こゝでは、種々な江戸柳界秘話も聞いたわけであるが、この欄へのせるには餘りにも複雑で、しばらく僕の頭が整理がつく迄筆がとれないのは残念である。

然し、早晚迷亭氏が「柳界水滸傳」の執筆にかゝれば、僕が敢へてかゝすともいへ譯で、従つてスイコデンの一日も早く諸君にデビ

▲「藤助」から、雀郎弘福寺句會へと、墨堤へ出る。落語「丸八」の怪しき古蹟は大體この邊だといふまいに、誰か教へてくれる。

柳橋切つてはなせば矢の如し

久其俊氏の古句スピード感説の出た柳橋あるひは待乳山、書割によく出てくる三國神社の鳥居、あるひは隅田河畔の燈籠など、迷亭、陣居、玉兎朗の諸氏より御懇切な説明をしていたゞき、珍しく、あたらかな墨堤の夕景色を、心ゆくまで味ひながら、俄かに變更になつた、會場、その名もみやびな「言問だんこ」歩を向ける。

▲入口に、「前田雀郎句會」大書してあつたのは、聊か愉快であつた。雀郎好みの河童灰吹き（分價四十錢）は、柳界に好評である。僕が土産に一つ貰つたからといつて、こゝで提灯を敢へてもつわけではないので、うはさをそのまゝこゝにかいた丈である。※

ユゝする事を（僕自身の爲にも）切に切に祈つてゐるのである。

▲今年の江戸柳界は、きやり祝十五周年的活動「川柳研究」の發展、雀郎一派の動き、同舟會、月曜會の飛躍、川柳人の理論的展開、川柳俱樂部の論陣等を主流として華かな一九三四年を構成する事であらう。

▲全柳壇展望のしげを編「百人一句」いゝ出版さる。喜ばしきかな。

（亂耽）

日本名所名物川柳

大阪の巻

本欄は益々好評で既に道頓堀・大阪の夏祭
四天王寺・猿蓑・新世界・おこし・道頓堀
てゐる。盛んに佳句を投ぜられたい。(路郎)

麻生路郎選

大西長三郎書

八 十日 戎

老ひ先きを十日戎で考へず
お寶は酔ふて程よく揺れるなり
厚司着のまゝで大判うけて来る
おたやんの飴を母親なめさるれ
切下げは知らず十日戎来る
十日戎小判一枚二枚踏み
小寶の笹丸鬨にひつかゝり
一年の家賃をあげる廣田町
十日戎みんな本家でならぶ店
寶惠籠が通つてさうなシャツを編み

明珠 三汀 櫻天 二南 素月 桂風 新水 鳥語 松太郎 方よし

十日戎藝者と来るは眠い頃
寶惠籠の聲へあんまの手がゆるみ
十日戎飴とはこりを包むなり
賽銭のかさを見てゐる懷手
寶惠籠をま抜けた顔が見送つた
十日戎巡査に感謝するも母
吉兆の笹さし上げて戎橋
抜けた下駄拾はれもせぬ宵戎
義理で行く十日戎にいゝ願ひ
資本主義見せて飴屋は幅をとり
十日戎足は踏まれることにきめ
寶惠籠の中は目を射るものばかり
結局は酔ふてしまつて残り福

蝶之助 紫石 夕鐘 遊歩 巷二 夕路 一笑 四葉 しのぶ 泉流 みつる 巷二 白柳子

十日我兩手でうける
氣で出かけ

路郎



千兩の小判は男の子に持たせ 同
十日我もう丸髷がいたにつき 曉童
丸髷は十日我の艶でゐる 同
いさかふて出て來でみれば宵我 王京子
愁心をはつきり知つた眞美壽さん 一笑
負けてゐず十日我の髭をつけ 昨夕
損をして十日我へ遠くゐる 機見女
敵意など見せて吉凶巾をとり 明珠
十日我男の息を頸にうけ 末廣
押されつゝ見るお多福の顔が延び 一笑

大阪の巻 麻生路郎選

「千日前」 三句 二月三日締切

北陸の巻 安川久流美選

「兼六公園」 三句 二月三日締切

(以上投吟先 本社事務所宛)

本社頌春句會

一月六日夜 於日本橋俱樂部

皇太子殿下御誕生！國を擧げての歡喜の中に、昭和九年の太陽は輝いた。

此榮えある新春六日の夜、餅花揺れる日本橋俱樂部のステージを圍んで、開催された本社句會には、熱心なる近畿柳友のほかに遠く島根の同士が参加して、和氣霽々春を讀ふる大句會となつた。

句題も奉祝と新春に因んだものが、出題され路郎先生は兼題十日戎の披露後、歳旦に當つての希望と抱負に就いて熱辯を振られた。折からこの盛會ぶりを大朝紙上に掲載すべく「新聞街一丁目」記者の來場あるなど、團樂と緊張裡に終始した。紀念すべき頌春句會は、吉例の記念撮影を以て目出度くハッピーエンドの幕を下した。(春光記)

出席者

秋光、冬呼、影泡、天馬、蝶之助、一笑、王京子、紫石、夕路、觀月、富王、末廣、白戀、佳峰、しのぶ、一羊、勝人、泉流、鳥語、桂風、鶴郎、えいを、冬子、遊歩、

昇鯉、丹生、素月、清美、掉二、松太郎、沐天、勝二、白柳子、卷一、櫻天、踏幸、本社同人

路郎、綠雨、櫻見女、春光、艸樂、山月、豆秋、沒食子、小柳子、里十九、水車、新水、四葉、山雨樓、夕鐘、翠夢、みつる、變人、萬よし、二南、角丸、新市街、開路

席題 外出

互選

外出へまだ用のある初年兵 泉流
外出のいつそ氣樂に留守をする 觀月
掛取へもう外出のほかはなし しのぶ
外出は嬉し從妹に會へるなり 白柳子
腹立て、出る外出の曇つてゐる 小柳子
ランチでも喰ふおくふと獨り出る 鳥語
訪問者廻る所が貸し過ぎ 清美
家内中出る日曜に雲もなし 掉二
外出は動きのとれぬ友に會ひ 末廣
外出にふと靴下の破れてゐる 新水
あまりにも外出の多い妻を持ち 王京子
外出へ守衛一々うなづいて 山月

雨の降る夜の外出を疑はれたまきかの母の外出白い足袋行く先へ云ふ外出を信じきりたまきかの外出へ星が降るやうな外出へあまりに母の行き届き頼まれた留守へ郵税不足が來外出のふと氣がついた爪を切り外出をしてこそかと火を埋めビクニツク簞笥が朝の部屋に鳴る外出にもう二三圓欲しいなり外出の一人戻らぬ朝となりゆるされてゐる外出のあてがなしぶらつと出ても商賣氣ははなれなさて用もない外出の二人連れ外出もようせず按摩の世話になり營門を出て外出の旗が揺れ宿の名を確と覺へて歩きに出鼠取り掛けて二人で遊びに出外出の晴着へ犬は叩かれる外出の先を聞かせた子煩悩かこつて出て出る用件が太附がり水漬をすゝつて外出戻つて來

豆

初詣り今年は一人抱いて居る勝人
初詣り下駄は裏方の方へ向き沐天

初詣大和は頸へ粒雪する
 押されてゐることも嬉しい初詣り
 賽銭が頭を越える初詣り
 初詣今年の慾を申し上げ
 風が鳴る野道をはずに初詣り
 初詣り足を踏まれて戻つて来
 柏手を思ひきり叩く初詣り
 初詣り出雲の空は晴れ渡り
 初詣り此處にも巡査いかめしく
 初詣り妓に肩を叩かれる
 初詣り下駄の鼻緒が堅過ぎる
 (佳)日本の杉の匂ひの初詣
 (同)父が抱き母が抱きして初詣り
 (同)厄年の男になつて初詣り
 席題 男の子 萬よし選

勝二 水車 二南 艸樂 四葉 王京子 變人 山月 富王 山雨樓 紫石 新市街 觀月 沐天

男の子はしいほしいが父の癖
 男の子運轉臺にへばり付き
 男の子三原色をよく使ひ
 泣かされて泣かずに歸る男の子
 泣かぬ氣の眉が短い男の子
 利かぬ氣の眉が短い男の子
 父さん占領してる男の子
 大雨の中を悠々男の子
 エスカレーター面白くな男の子
 男の子父に負はれて飲屋へ来
 無難作に肩へまたがる男の子
 姉の霜焼けた笑ふた男の子

雨の日と風呂が嫌いな男の子
 片袖を落して歸る男の子
 男の子あつさり姉を泣かすなり
 母親の不平は男の子に言はせ
 男の子大きな聲で辻を折れ
 買ふた風上げるとこない男の子
 男の子叱れば叱る口を眞似
 病人がゐる男の子外でゐる
 にぎやかな膳にするのも男の子
 頭にも泥がついてる男の子
 泣かせたは二つも下の男の子
 洋服のつくり待てぬ男の子
 男の子硝子を割つて逃げにけり
 男の子落第したを平氣でゐ
 男の子財布を直ぐに空にする
 男の子棒の長さで巾がき
 一錢を握れば走る男の子
 男の子父は名付けの墨をすり
 (佳)喧嘩して一諸に泣いた男の子
 (同)男の子裸になつて怒るなり
 (同)非常時を聞きかちつゝ男の子
 (同)さし上げてさし上げき男の子
 (同)男の子まさかと思ふことも
 (軸)サリベルへ家中逃げる男の子
 席題 チップ 新 萬よし

櫻天 遊歩 小柳子 艸樂 綠雨 冬呼 鵲郎 同 月 同 一笑 同 變人 山雨樓 同 末廣 同 同 紫石 小柳子 翠夢 王京子 二南 萬よし 水選 桂風

心づけお茶子便利な帯があり
 番外のチップに女給もめてゐる
 チップ無い客は女給の好きな人
 チップやる顔の鑑見られてゐ
 安かつたチップタクシーで聞か
 チップの威力へ白い手が重なつて
 ノーチップマントの裾がひつか
 釣り銭のチップの禮は横を向き
 チップ取る時の瞳は丸かりき
 ノーチップ白粉焼けた見せられる
 胸算のチップを餘り程に酔ひ
 繩のれんチップに足らぬ金で酔ひ
 (人)乳のはる背のチップの少
 (地)よいチップオーバの裏を見
 (天)笑くば又チップを請求も如し
 (軸)皺にする十圓札もチップなり

掉二 みつる 冬子 山雨樓 鳥語 春光 一笑 同 沐天 蝶之助 同 彩泡 變人 白柳子 没食子 新水

社 告

今回左の諸君が同人として入社されま
 した。

笹田角丸
 村田新市
 東谷聞路
 平井冬呼
 長谷川三汀
 加藤文醉



向 上

朝 田 新 水 選

向上の口には出さぬ作業服 春光
向上はうつかり赤い灯になじみ たけを
向上を囁ひし友が無心に来 世都象
晩酌が續き向上忘れられ 元山
向上へ女將笑つてとりあはず 利生
なんのその居食に足らぬ向上ぞ 禿山
失戀のさて向上の氣がゆるみ 虹子
向上の足跡を知る日記帖 柳人
向上へ原始のまゝに日が暮れる 機見女
向上の筈が加給に不服あり 夢迷
向上を目指す給仕のいゝ返事 清春
向上の我に人生意義があり 九波
向上の氣分へ女給本を持ち あや美
輝いた目に向上の意氣を見せ 白戀
向上の汗と油に汚れて居 朝雨
向上の其の熱誠は報いられ 笛秀
向上の彼方に見ゆる窓の月 白菊
向上を口癖にする社長にて 菊路
向上へ春のめざめが恐ろしい 史郎

向上のたゞ獨身をさびしが 貴代志
江戸ッ子で来る向上の旅便り 新市街
向上の通信簿を胸に抱き 猿兒
向上に靴の疲れをふと感じ 小松
向上の一つ 青年髪を分け 朱郎
向上を説く先生の瘦せた顔 いの助
北風に耐えて向上心は燃え 浪人
新記録目ざす選手のもゆゑ意氣 四葉
向上へあまりに強い姉の頬 竹雅
向上の街は汽笛の音で明け 晨一朗
賞與まで向上振を見せられる 民子
向上の顔神經質に瘦せ切つて 花涙
俺とても向上心に燃えてゐる 柳夢
向上の夢が結婚から抜ける 月茶
納豆賣る胸も向上心は燃え 春峰
向上の覺悟脆くも崩るゝ日 默紅
誘惑を日記に書いて向上す 曉童
向上の理は辨へど貧しくて 三八期
向上心紫煙の中に沸いてくる 宙芥

川 柳 家 戸 籍 調 (續)

(係) 山 雨 樓

(1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生 月 日
(4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務
先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以
外の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌
ひなもの (12) 川柳に手加染めた年月

(354) 紀 二 山

(1) 紀豐三 (2) 二山 (3) 明治二十五年六
月廿六日 (4) 京都市内 (5) 郊市松原通
柳市場東入 (6) 寫真材料繪具染料工業藥
品 (7) 何は見ても富士は日本へ物を云ひ
改札の關所をまたい子を抱え (8) むゐて
來た運を女が邪魔をする箸戴て三百六
十五日來る (9) 歌かるた藤八奏謠曲きお
んばやし等々々 (10) 妻あり現在子供四人
(11) 麻雀ダンス薄ッべらな人 (12) 明治四
十四年

(355) 田 中 金 一 郎

(1) 田中金一郎 (2) 句太夫、劍光、等 (3)
明治二十八年三月二十日 (4) 芝區三島町
十三五 (5) 小石川區柳町二十三 (6) 椅子と
裝飾 (7) 支那はまだ取れず醒醐の花の雲
(劍花坊) 要するに拜啓金を借せ願首 (林
鐘子) (8) 好きだつたもの飯入の膳に出
る。春の客はまだ歸らない針仕事。遅か
つたネと寝返つた母の聲。 (9) 落語、野
球、鍋でお銚子 (10) 妻と二男一女 (11) 理
屈 (12) 大正三年三月

向上の店に明るい顔ばかり
 向上は十二月の空見つめてる
 三十のまだ向上心の見えて居る
 向上を過去から刺戟してくれる
 向上の理想へい空を見る
 向上へ向けた一歩に意地を見せ
 向上心語れば伯父は笑ふのみ
 賃仕事向上心を強くさせ
 やかましく云ふ程向上とおれず
 答案へ嬉しい向上振りを見せ
 向上の淋しい男咳をする
 向上の心寮歌の唄となり
 向上の書籍まくらに居眠りぬ
 向上を夢見る朝が身にしてみる
 向上の一步一歩にしてみる
 向上の日本の上にあきたらず
 向上も憂けれ世間は花曇り
 半纏でまだくくと働いて
 向上を明日に誓つた若さなり
 向上を誓ふ握手も春なれば
 義理一つ舐きて向上ゆるされる
 向上をあつさり捨てる酒の味

繻 帯

繻帯へ顔をしかめて傷を訊き
 繻帯は問はれるまゝに答へてる

向上の心都會で失戀し
 向上へ先輝らしい意見なり
 向上心此の兒の爲めにとと思ひ
 向上は金庫の艶に見る暮し
 向上へスバイク嬉しい音をたて
 向上の友を嬉ぶ年賀狀
 放蕩の兒も向上の雜誌讀み
 向上を説く先生の古帽子
 向上心不具者とし意氣を見せ

住 句

朝露の中に向上影を消し
 向上の氣持もその日暮しなり
 向上の又明日になり明日になり
 涙なき域に向上達したり
 向上へ佗びしく酒がつきまとひ
 向上に費ゆる心淋しめり
 一生を給仕ではない講義録
 向上の日本へ碧い眼が光り
 向上へ又目標のあらたなり

軸

サービスの向上をウエトレス

中 澤 濁 水 選

巻き直す傷の痛みのなほやます
 繻帯の長さを見せた大手術

(356)

伊 藏 道 浦

(1)伊藏頑之助(2)道浦(3)明治三十六
 年四月三十日(4)東京市深川區(5)東京
 市深川區富岡町二丁目二十三番地ノ一
 (6)材木商(7)ちよつと舉げきれません
 (8)發表するまでは、大概の句に持つて
 居ります。が活字になる同時に、これは
 忽ち解消します。結局一句もないといふ
 ことになりました(9)讀者ぐらゐ(10)かつ
 て有つた證據に子供が一人居ります(11)
 醜いもの(12)大正九年

(357)

小 川 百 雷

(1)小川慶一(2)百雷(3)明治三十四年
 十一月六日(4)大阪市(5)大阪府西成區
 柳通五丁目五(6)川柳と舞踊(7)三匹に
 なつても泥鰌入り亂れ(作者不知)この句
 を知つて川柳を作り始めたものです。
 淋しさにふと取り出して見る鏡(路郎)
 (8)有るやうでありません(9)澤山あり
 ますがみな浅いものばかり(10)何れも無
 (11)ちよつと思ひ出せぬ程度(12)大正八
 年

(358)

武 田 玄 六

(1)武田玄六(2)雅號及別號ナシ(3)明
 治三十三年五月二日(4)秋田縣矢島町
 (5)東京市神田區久右衛門町三(6)ゴム
 製品製造問屋(7)鼻唄である淋しさを美

和服にて來たのを見れば縹帶し
縹帶の何をか恨む松葉杖
縹帶がすめば選手はもう走り
縹帶の突當られた聲になり
縹帶の白き集金斷られ
取替へる縹帶に母目をつむり
縹帶の何時をも白い重いきず
血、血、血、にじむ縹帶に面會謝絶
からくれないの縹帶になる擔架
縹帶へ男の意地の黙したり
縹帶を取る時の一喜一憂
縹帶を親の小言も添へて卷き
縹帶はかう卷いたキズはキズ
縹帶にさめて二人は説諭され
縹帶を卷いて出てくる次の幕
縹帶のそれから怖い堺筋
縹帶の白さへ青く生きてゐる
はづかしい傷に縹帶目立ちすぎ
縹帶の血に冷靜を取戻し
縹帶に變り果てたる血がにじみ
縹帶に青春の血が黒く枯れ
恐怖まだ覺めず縹帶血がにじむ
縹帶は母校を背負ふチャンピン
母の戀しい縹帶のしめごとち
縹帶の縹に花束をささげられ
縹帶を圍んで撮す婦人會
丁路
竹雅
華坊
九文錢
竹城
玉兒
彌一郎
夢迷
喜雨
機見女
柳夢
波銀
柳夢
禿山
輝親
紅郎
史郎
華坊
紅
竹城
某人
某人
柳人
健二
機見女
小樓
葉光

(356)

大鶴喜由

(1) 大鶴喜由(2) 同(3) 明治三十三年六月二十九日(4) 大分縣速見郡藤原村(5) 大阪市東成區大今里町四三二(6) 藥劑師大阪通信診療所本所(7) 皇太子早くも春になし(給ひ)路郎那所(8) 肩をうつした日本刀(水府)其他愚陀、亂耽、葉平、機兒女氏等の句の新しさ廣さ深さに感服してゐます(8) 土となる日を俗人忘れたたり。曲線美けたものどもの腫を感じ、白壁に泪を塗れば吸込みぬ(9) 園基藥療研究(10) 妻アリナナシ(11) 鮭、豆、自己主義狡猾、おべつか(12) 昭和二年秋頃

天王寺支部會

日時 二月十一日夜

會場 大阪市電寺田町西入

内藤製作所

兼題「國旗」三句

幹事（豆秋、鶴峰）

繡帶のまんま署長に賞められる
利生

繡帶は少し遅れて旋凱し
健二

繡帶を解けば熱河の砂が落ち
青兒

繡帶の眼に滿蒙の廣い原
祥月

繡帶 祖國を守る血で染り
玉兒

御下賜の繡帶に染む真赤な血
某人

住 吟
繡帶の汚れ切つてる夜業の灯
朱郎

體操へ一人はなれて腕を吊り
新市街

優勝は意外繡帶した男
史郎

繡帶へベルトは知らぬ顔で廻ひ
紅郎

繡帶の譯へみんなが笑ひこけ
丁路

繡帶で暮して來たと凱旋兵
春海

繡帶が取れて嬉しい君と僕
白菊

繡帶に友とも見えず友のゐる
猿兒

繡帶が死の沈黙に白すぎる
玉兒

繡帶の腕指揮刀を振りかざし
九波

五 客

繡帶は何時か讀書に趣味を持ち
小松

追突の責と別に腕を吊り
竹雅

繡帶が濟めば生命の念をおし
四葉

かんねんの傷繡帶に生きのびる
あや美

繡帶の白さに秋が引きづられ
晨一朗

(人)繡帶は運の強さを聞かざる
ライト

(地)不具^せ日の繡帶の子が淋し
竹城

(天)繡帶は三千圓の男の兒
白峯

軸 吟
繡帶へしづかにベツト畏り
濁水

沒の類句について

愛人へ巻く繡帶の手が震え
繡帶を巻く愛人の手がふるえ

看護婦が巻く繡帶よく動き
看護婦の手に繡帶はよくさげ

右の各第一句を頂戴しようとして、再思三考
の末、終に兩没と致しました。

繡帶と、看護婦とが最も多く

繡帶を巻く看護婦のプロフィール

繡帶を巻く看護婦の無表情

繡帶を巻く看護婦のエロチック

繡帶を巻く看護婦の手の温み

繡帶へ看護婦の手が柔かい

繡帶を巻く看護婦の手が白い

繡帶を巻く看護婦の手を見つめ

巻き替へる看護婦の手のよく動き

看護婦の巻く繡帶のしまりすぎ

繡帶を看護婦キッウ巻いてくれ

なごで、鉄動、酒、松葉杖、人々に尋ねられる

巻込も戀が之に次ぎ、相思、實戦談それから

働く途、慰謝料、巻く間の彈丸、凱旋、犯人

との對照等總數六十餘句ありました。

川柳書架 五〇

初 昭和川柳百人一句

宮尾しげを畫並編

▼序文「上梓について」から抜くと、明治、大正、昭和を通じての川柳作家を知りたく、川柳きやうへ、發表したものを、年越で一百人になつたので、一まづ初篇と銘うつて上梓する事にした。(中略)本書に發表した句は、すべて作家の自選になるものであるが、今までの句集と趣を異にしてゐる、これは編者の望が叶つたので有難く思つてゐる。(下略)

編者

▼昭和九年一月十五日發行。四六版二一五頁。特製貳圓一五〇部限定。上野公園六丁目一、二九〇宮尾しげを方小島頒布會

▼昭和の川柳家百人をとらへて、そのカルチュアを紹介したことが本書の特色であるが、それだけで満足しない著者は更にその作家の自選句と柳歴を附してゐる。點など苦心の跡が歴然としてゐる。

花柳壽山調 (その三)

坊野壽山 著

▼發行の月日がないが、最近出たもの。三百部限定版。和紙横綴小本。二一枚發行所は東京市日本橋區蠣殼町二ノ六一松花。

▼花柳吟を以て鳴る坊野壽山自家版である。

川柳ハイロツト欄

着想は廣く

福田山雨樓

「寢顔」の投句には子供を詠つたのが多かった。約半数は子の寢顔の句であつた。僕は子供の句が特に好きで、従つて子供の句が比較的多く出来る。純な朗かな子供が、すばらしい川柳を生まんものと、常に子供の姿や氣持に心を寄せてゐる。しかし子供の心は割合に單調であり、その姿も原始的であるだけに新味な句、潑刺とした句が割合に得難いものである。自分では獨創味のある、すばらしいものが出来たと思つてゐても、類句や先鞭句が尠くないことを餘程警戒しなければならぬ。しかしさう云つたかゝると獨創は飽く迄尊重しなければならぬのであるから、類想などに恐れることなく、ほんとの自分の句を作るべきだ。そして類句を見付けたとき潔く自分の句を削つたらよいのである。選をされる場合には選者が、その仕事をしてくれる。

さて子供の寢顔の句を集めて見ると

子の寢顔さつき叱つたのを詠びる
孤鶴 叱られて無心にねむる兒へ 詠び
天馬 あきらめた寢顔へ買ふて。と決め
黙紅 土産物片手に寢顔をたしかめる
白戀 腕白のひる寢の顔に 蠅たかり
龍二郎 子の寢顔それ／＼蠅が飛んで來た
白羽 寢顔よ父ちゃんは今歸つたんだよ
見路 赤ん坊の寢顔をのぞく 共稼
泊童 可愛ゆくて、ね寢顔へほゝを寄せ
扇○ 風の強さへ 子の寢顔みる
蛙堂 賃仕事子供の寢顔にはげまされ
美津女 兒の寢顔ブロの世界と別のもの
木石 などである。この十二句を初めから二句宛眺
めてみると、各々似通つた着想を表はしてゐる。先づ孤鶴君と天馬君のであるが、前者は句の調子もよくまとまつており、親としての愛撫が肯かれる。しかし「詠びる」より「悔ゆる」と云ふのがほんとの心持ではないかと思ふ。後者は下五が四音字で止つてゐることが

調子をひどく損じてゐる。「無心にねむる」もありふれた言葉である。次に黙紅君と白戀君のは、これも前者の方が整つてゐる。後の句「寢顔を」の「を」はいらないし、「片手に」は「片手の」方が本當であらう。龍二郎君と白羽君のは、何れも見たそのまゝを十七字にしたと云ふところである。「赤んぼのひる寢の鼻にとまる蠅」とすればいくらか面白味が出るであらう。見路君と泊童君のは、後者にまとまつた感はあるが、想にうま味が足りない。前者は句がまだ練れてゐない。旅から歸つたときなどの親の純がもつと表象化されたいものだ。扇○君と蛙堂君のは、前者は態があらふれてゐる。後者は十四字で句が緊つてゐて、しかも暖いものを感じる。只想に新味のないのが物足らぬ。美津女さんのは筋の通つた句と云ふ感じがするが、常套的であるやうに思ふ。「子供の寢顔」は「子等の寢顔」の方がよからう。木石君のは作者近來での出色である。句は批判的な見方をしたものであるが、そこに確固たる川柳を握つてゐる。子供の句と云へばすぐ自分の子供、近所の子供を對照するものであるが、此の句のやうに廣く社會に眼を放つて見ることも忘れてはならぬ

い。

次に子供の外に家族を對照とした句もかなりあつた。

- (1) 姑が起きてゐるのに氣の毒な 正一
(2) 安ら^{かな}祖父の寢顔え五燭の灯 蛇之助
(3) しみんと母の寢顔は拜み^も 葉光
(4) 母となる妻の寢顔に我のぞみ 曉
(5) 添乳へ母の寢顔に子の寢顔 逸居
(6) 母の顔夢にみつけた兒の笑顔 緩紅
(7) 老婆の寢顔を見ると年が知れ 柳夢
(8) 寢顔など云そ居^る子^は五人 水客
(9) フト眼覺め妻の寢顔へ詠を云。 晃路
(10) 毎日の疲れへ拜む娘の寢顔 三代吉
(11) は^はく^く寝に來たが阿父^{おや} 愚堂
- (1) は嫁のことを表はしたのであらうが、意餘つて言葉足らずと云ふところである。再考を望む。(2) は下五の「五燭の灯」が働いてゐない。單なる寫生以上に出てゐない。(3) これは恐らく作者の實感を詠つたものであらうが、上五「しみん」が説明的で物足りない。(4) は下五の「我のぞみ」が拙い。と云ふよりかよくわからぬ。(5) は句として語つてゐるものがない、内容が空虚である。そこに何物を擱まればほんとうの句とならない。

(6) は子供の寢顔の項に入れるべき句で、想像を働かした句であるが、面白い。(7) は叙法が露骨で句全體の觀點が低いと思ふ。「老婆の」は説明的で生硬だ。「よく眠る妻の寢顔は頬が落ち」と云ふ風に多少含蓄のある叙法を選ばれた。(8) は面白い。そうして人間味が滲み出てゐる。(9) は「詠を云ひ」がよくわからない、何故詠を云ふのか、その氣持が汲み取れない。即ち句が獨り合點になつてゐる。(10) は親が働いてくれる娘を拜むと云ふのか、或は毎日労働に感謝し乍ら娘の生成を樂むとでも云ふのか句意不明である。即ち其の難點に蔽はれてゐる。(11) は國の父が息子(又は娘)のところへ訪れて來て疲れた寢顔へ呼びかけた句であらうか、言ひ足りない。叙法も纏りが付いてゐない。そして願意から稍離れてゐる。

家族以外を詠つた句は尠ない。

- (1) 羽根を突く肩へ寢顔がアラさち 美よ坊
(2) エプロンの姉の寢顔えヒゲを生 清雄
(3) 病んでゐて笑はれま^まする寢顔 規堂
(4) 信じ切つて寢顔が二つ並んでる 輝親
(5) 瘦せこけた寢顔靜かな涙の音 清春
(6) 社長とはさつぱり見えぬ寢顔 吞空子

(1) は女中か子守の春を詠つたものだらうが、「アラさがり」は大げさだ。句が不自然である。(2) 滑稽味を盛らうとした點は窺はれるが、この句も不自然さを免れない。(3) は心理を覗つた句、そして實感の句だと思ふが、その心持は稍難解である。「寢顔」で結んだのが無理かと思ふ。(4) は若夫婦の句であらう。それにしても「信じ切つて」はちと月並な見方かと思ふ。(5) は作者苦心の作、その熱心さには動かされた。だが「靜かな涙の音」では追つて來るもの薄弱である。「瘦こけた寢顔潮騒がすかなり」としては如何。

(6) 寢顔に社長など引つ張り出して來た迄面白く、異色であるが作爲が眼につく。穿ちにしては穿ちに徹しておらぬ。

さて以上の中から緩紅、水客、木石三君の句を佳吟として頂く。

次回募集

- 一、調題「夜學」一句
一、切 二月十日
一、投句先 大阪市浪速區湊町保線事務所

福田山雨樓宛



紫石氏を偲びて

石 丸 春 峰

十二月八日はあまりにも悲しい日であつた。どんよりと曇つた空は押し迫る晦日へ人々の心を何んとなくいら立たせるで朝し。電話がかゝつた。紫石氏宅からでる「主人が死……」もう次の聲は曇つて居た。「何ですか」問ひ返したが返事はなかつた。

自分は自分を疑つた。まさかそんな事はないと……取敢ず自轉車で駆けつけた一と足踏み込んだ瞬間……僕の心は眞闇になつてしまつた。拶揆もせず奥の間へ駆け込んだ。紫石さんといきなり叫んだいつも「春峰」と直ぐ言つて呉れる懐かしいの聲はもう聞く事は出来なかつた。五健氏始め柳人一同も同じ様に疑りながら駆けつた。それはあまりにも急逝でありました。柳友の驚きは如何ばかりでつたでせう。明日に迫まつた松山支部忘年会の前日ではないか……其の一日を待たず而も其の樂しかるべき會の日は自分の柩を見送られる日は……神はいざ知らず誰が豫想した事であらうか。

枕頭に殘されし原稿紙短冊句會ヲ樂しみし天賞(クローム腕時計)其他地人賞等々來る人泣かざる者はありませんでした。

紫石さんは子供が少なくなつた一人嬢ちやんがあるばかりです。大へん可愛がられて來年からは女學校へ行く様になつたと大へん樂しまれて居りました。何事によらず熱心家で親切で又淋しがるのが大嫌な人でした。

僕はいつも「紫石さん」と呼び又紫石さんも「春峰々々」と呼んで可愛がつて呉れる。それはもう柳友と言ふよりもむしろ父でした。慈父であつた。度々意見もして呉れた。又始めても呉れた。自分の事の様に嬉んでも呉れた。一週に一度や二度は必ず道後の温泉に行く。歸りは必ず一寸でも聲をかけて呉れる。暇な時は将棋をする。丁度よい相手で勝つたり負けたりで若し負越した時は今度を約して歸るのであつた。川柳會が迫る句は出來たかと必ず問ふて呉れる。會に行く

時は必ず電話で知らして來る、時々は飲みにも行く、又相談もする、萬事親子以上でありました。

丁度亡くなられる前夜も來られて將棋をして明後日に迫つた柳會を樂しんで笑ひ乍ら「サヨナラ」と言つて別れたあの顔、あの言葉……あれが最後にならうとは……餘りにも悲しい別れでありました。今もまだ生きて居る様な氣がしてなりません、暇な日などフト今日あたり紫石さんが來ればいゝになと思ひ浮かべた次の瞬間言語に絶する淋しみを感じて居ります。今となつて考へる時ありし日の冗談も又淋びしさを増す一つです。僕にはおらく一生忘れる事の出來ない第二の父紫石さんであります。(カワツは紫石氏)

—紫石氏句帳より—

母親へ着物の出來る爪を見せ
袴代帯代それで事きまり
舞妓ふと乳の丸みへ觸れて見る
事務所の目めぐり明日にして
再會の矢つ張り辭を懷かしみ
金言は俺の暮しへ無理ばかり
これから娘の嫁ぐ夜るとなり
藝者今日過去を解消して嫁ぎ
湯の町へ着くと暴落聞かされる
こゝろに仲居團扇の風を呉れる
世帯苦の隣も同じ陽は當り
初恋のやたら郊外歩るかされ
老人の足から冬を知りはじめ
涼み臺母は眼まひのする高き
格子戸の重さに八百屋恐れ波
投げ出した足へ同んなじ波頭

れ創を句るあちのい



川柳雜誌社
新居濱創立會
(愛媛)

一月六日

於蛭子屋旅館、越智虹子報

皇紀二五九四年一月六日それは吾々新居濱川柳人に取つては忘れぬ事の出来ぬ日でありました。當日松山支部幹事石丸春峰氏を劈頭に續いて今治支部の四創立の來會あり、川柳雜誌社新居濱支部の創立記念會の幕は愈々切つて下されました。出席者十三名他に投句者十數名、本社、綠雨、五健氏の祝電等あり盛會でありました。

兼題「日本刀」

石丸 春峰選

實戰談日本刀を出してくる
村正の話にふつと寒くなり
日本刀へ陣中佳話の夜は更く
傳説を聞く奉納の日本刀
(佳)零落の家柄を知る日本刀
(同)日本刀護國の鬼となりました

心小
府紅
蛇の
史助
郎十
靜

(同)燈明は暗し傳奇の日本刀
(人)日本刀正義の光放つてゐ
(地)數島の魂を見よ日本刀
(天)鞘とれば玉散る様な日本刀

兼題「闘士」 渡邊

白羽 心府 虹子 鼓多朗 曉童選

兼題「鬪士」

渡邊 曉

家庭では關士オールドミスで居る
關士の母は神へ佛へ
童顏のこれが聞えし關士とかか
メーデー關士としてのいゝ姿
關士ふと瘦せゆく妻に目をおとしし
喋々と關士を自認する男
關士今日關下に握手して貰ひ
決然と關士紙幣を投げて立ち
往年の關士淋しく胸を病み
同爭議團關士を送る唄となり
同錢湯へ關士らしくもない姿
人關士卓の毛虫に氣がまぐれ

白史十春宵紅一心十默蛇春
羽郎輝峰明風府靜紅助峰

(地) 關士案外きれいに髪を分け
(天) 車窓から握る關士の手が
底題「九」の字詠み込み越智
杯の底まで届く燐燐の灯
九星を信じ不運のまだ續き
君の名を九官鳥におぼえられ
幸福な生活へ九時の耶蘇の鐘
(五) 白人種九千萬におのきめ
(同) 九年母に故郷の匂ひ懐しく
(同) 警報の噂九月の空模様
(同) 九段坂手織木綿の五つ紋
(同) 黄金の艶十九の娘蹴躑づき
(人) 分産に昔を偲ぶ九谷焼
(地) 割切も九九マルクス資本論
(天) 九段坂晴れた社頭に鳩が飛ぶ
席題「放浪」 谷

小一松風
曉子選
史曉
心紅
青紅
默健
曉健
紅健
一紅
默紅
曉紅
心紅
史紅
曉紅
子紅
選紅

席題 一放浪

谷心府選

放浪の國の祭を思ひ出し
放浪のある日の戀が突飛すぎ
佳放浪の夜寒故郷の爐を思ひ
同放浪の故郷へ續く海を見る
人放浪の子に諺のつかぬ母
地黄昏を行く背が丸い放浪者
天さすらの今日の命鐘が鳴る
軸羽子突きたじく見てる放浪者
席置「權力」 曾我

心宵小春曉宵白曉
府明松峰童明羽童

席圖 一槽力

暫我部有明還

權力無駄な相手な差のへる
權力を持つてむつちりして顔
權力の音がベルトが廻りゐる
(人)權力で強ひる男の眉が濃い
(地)權力へゆがむで延た松を見る
(天)權力へ黙す分別淋しまれ

默曉心虹心曉
紅童府子府童

(軸) 権力は座輿にあいて酒にする 宵明

席題「祝」 平井小松選

(五) お祝に貰った靴の大きすぎ 曉童

(同) 御祝儀へ仲居の膝がまん丸い 同

(同) 祝杯を飲み乾してから見ろ姿 白羽

(同) 旗の波奉祝塔は空に浮き 黙紅

(同) 奉祝へ小國民の靴の音 同

(人) 祝電の二ツに沸いてくる朝 白羽

(地) 祝砲が国防線へ響く涙 宵明

(天) 祝盃の酒がこぼれた古壺 白羽

席題「国防」 木村默紅選

国防をハツキリと知るラッパの音 心府

(人) いたいけなすも国防の鐵かぶと 宵明

(地) 国防の第一線は血のしづき 虹子

(天) 国防へ葉を打つて五燭の灯 宵明

席題「神名」 高橋白羽選

妻君へ濟まぬ神名をふと漏らし 心府

思案ふと自分の神名思ひ出し 小松

ニツクネームあるとも知る支配人 波多朗

理想には遠い神名で呼ばれてゐ 虹子

(人) 新入生教師の神名から覚え 心府

(地) ニツクネームの儘親分で通つて 默紅

(天) 淫いニツクネームで世を渡り 宵明

(軸) 女ふとニツクネームの顔にぞ 白羽

席題「大根」 清記 互選

大根抜く手へ書留が来る 曉童

大根の太さ自慢に提げて来る 静夫

大根の難が寒さへ増すばかり 虹子

大根の白さに嘘が言えぬなり 宵明

早速の大根なます 燭が出来 春峰

大根を軒に吊るして年は暮れ 洋路

川柳 塗青句會 (大阪)

雜誌社 十一月廿六日夜

熊谷紅居

「指」互選「嬉しい」紅選「杓子」變人選「手際」友帆選「小錢」謙公選「利酒」雅幽選明日「水

車選

指先の疵へ職業見透かされ 水車

霜やけの指で小爲替送るなり 變人

失業のつれづれ細い指を見る しのぶ

定年のまだ働ける指の節 紅

苦勞して指輪のいらぬ指となり 仰天

入營を老いたる母へ打電する 悅洋

嬉しさを枕へてのせて寝つかれず 陽光

嬉しさを母に甘へる日がつき 變人

退院の嬉しさで踏む砂利の音 紅

杓子とる片足だけが下駄を履き 雅幽

妻の留守パケツに浮いて居る杓子 友帆

手系よく見せる思案を借り来る 變人

子澤山小錢は別な所へ置き 水車

盛り場で小錢氣にする 懐手 しのぶ

小錢ふる四天王寺の陽も麗ら 陽光

せむい手品のやうに出す小錢 紅

年の暮八百屋の小錢さるに揺れ 水車

賣上げの小錢敷へて雨を聞き 雅幽

縁遠く女事務員小錢貯め 謙公

利酒のやうに禁酒は吞まされる しのぶ

利酒へ嘘の値段を言ふて見る 變人

料理人慣れた手つきで酒を利き 謙公

利酒へ今年は税が高いなり 友帆

利酒は丁稚の下駄を突つけて 雅幽

明日を裏切る女笑ふてゐ 悅洋

明日までの夢に布圍の薄すぎる 變人
終ひ風呂明日も働く星が見え 雅幽

川柳 今里句會 (大阪)

雜誌社 一月十八日 吉田水車報

力づく少々恨られまてもあるが 綠雨選

力にもならず無心も言はぬ子よ 艸樂

力では勝てぬ戀とは知りながら 艸樂

力瘡久留米餅がまだ若し 同

兼題 新 水車選

新しい顔へも一度繰返へし 艸樂

新しい思想へフケが多過ぎる 新市街

白梅のこのころにはふ新世帯 點美

新聞に眞晝に近い陽が當り 葉光

(軸) 新しい車惠方へ走らせる 水車

席題 月参り かほる選

辻占をさげて歸へつた月参り 没食子

月参りあめは途中下車したり 里十九

月参りこぶ茶も呑んで休んでゐ 綠雨

月参りうれしいつれも出れるなり 水車

見晴しもほめず降る月参り 綠雨

自家用を鳥居に待たす月参り 春光

席題 近所 艸樂選

煙たさは家主の家が二軒先 春光

(佳) は近所で飲まぬことに決め 水車

(同) 同業が近所に出来た愛嬌振り 春光

(同) 近所の子等か連れて父を待ち 綠雨

(軸) その近所通る帽子を目深に着 艸樂

席題 暖か 喜由選

梅咲いて障子の襦にある日向 没食子

(佳)ぬくもつた炬燵へ水道が洩れ
(同)暖かくなるまで待てと言ふ便り
(同)出前持はつて顔を見て歸る
(同)暖かき首を重ねてキリンぬる

川柳 御旅吟社忘年句會

維誌社
十二月十日夜

於心交社小室
紀 太選

樂焼の惜しいところへひがり入り
樂焼へふつと喜びの名をかきぬ
樂焼屋お客の趣味をつかんでゐ

席題「朝寝」

截首仲間朝寝が出来るとは淋し
日曜日朝寝ばかりが残るなり
(軸)朝寝また患者一人なのがし

席題「針」

針の様な苦言が迫る十二月
針仕事フと言傳てを忘れてゐ
針の穴母には暗い冬の空

兼題「番附」

番附の名へさむくと旅役者
番附の蔭から見合ひしてゐるなり
番附を見ずとも判る成駒屋

兼題「自惚れ」

自惚れてゐるばかりの金づかひ
自惚れは停電續く程がよし
自惚れも失せて女の厚化粧
自惚れは月を背負つて戻つて来
自惚れてやうやく嫉妬押さへてゐ
どの妓もおれに惚れたとて飲み

艸 樂
水 車
艸 樂
春 光

翠 夢
紫 石
翠 夢
紫 石
翠 夢
紫 石
翠 夢
紫 石

(人)自惚れへ仲居素氣なく煙草吸ひ
(地)自惚れ昨日と變るコースで来
(天)自惚れは口もきかずに歸る
(軸)うづほれを左様々と片附

阪大川柳會 (大阪)

十二月二十一日

丸島利生報
路 耶選

風邪氣味であるに疳たつて出来
ブルジョアのやうに嬢風邪を引き
風邪引きの課長大きくうがひなし
お見舞をお頼みすれば風邪だとさ

流感だマスクだなごゝ藥劑師
風邪ですと云ふて皮膚科に通つる
銀狐巻いても風邪を引いてゐる
風邪引きにした鉄動をひやかされ

風邪引きに鼻風邪引いて来る
風邪引いた鼻へとんどの煙が向き
末亡人子を抱く毎に風邪を引き
(人)やせかたは唯の風邪とは思

(地)あの晩の風邪よと女嬉しう
(天)風邪だけのことで新聞記事の人
兼題 移 轉 路

解消とならず別居といふ話
引越して近所に慣れぬ子の淋し
轉宅に方角のない若さなり
移越して度に世帯が小さくなり
移轉して来たその日から蓄音機
鬼門から少し反れてる移轉先
掛りへあんまり遠い移轉先
引越した當座は妻もめかして出

同 秀
同 柳
同 方
同 正
同 三
同 耶

同 秀
同 柳
同 方
同 正
同 三
同 耶

引越しなしたに丁稚はちよんざも
引越せど借家は遂に借家なり
引越しへかげ口をきく憎らしさ
避暑避暑 移轉の如き御騷
居なへてみたが子供は好き真似
サラリと四分の一に居を移し
何しするうちかわかつたことになり
移轉して前がよかつたことになり

(人)引越した後に棒が寒う咲く
(地)引越した人に委かす署長
(天)引退の官舎淋しく荷をまとめ

そうしときなはれと女將強氣なり
口繪ではよい奥様になりすまし
すゝり泣く女に膝をかすも哀し
十二月交通巡査に叱られる

(井上湧三兄の新婚を祝して)
いつまでも期に笑へ長火鉢
他人の眞似併しあぐい眞似ば
君を待つアラジョレイロの苦さなり

マスクをとれば眞赤な白野辨十郎
パトロンにしては男の小さすぎ
師走とも知らずに呱呱の聲をあげ
ポーナスは服の上から撫で見る

(秀)かき飯の蠟の如くに羞びたり
川柳維誌社
箕ヶ池支部

新春句會

一月七日

石森靜太郎

美しく晴れた空がみえる娛樂室に、流の助
晴夫を迎へての新春句會は、非常に盛會だつ
た。流の助寄贈の人形を出席者に進呈、記念

一 秀
柳 秀
方 正
同 三
同 耶

同 秀
同 柳
同 方
同 正
同 三
同 耶

寫眞撮影ありき。

兼題 鼻

流之助 選

鼻高きわたしに戀もありません

鼻毛列べて生計の苦をきいてゐる

意志強き鼻を眞ッ正面へ向け

いもうとの鼻を噛へばむきになり

やさしくなつゝ父の鼻がさびしい

(佳)鼻すじかだんぐ亡母に似て青

(同)鼻のきれいなつめたい戀で

(同)人形の鼻がかけてる十二月

(同)その次の男をさがす高い鼻

(同)盃へ嘲りとなる鼻の先

(同)青春の鼻へとんぼ飛ん来る

(人)鼻をつゝゐて女からおこらる

(地)臨終の友の小鼻の淋しかり

(天)落魄のつめたき鼻となり

(軸)鼻かなし闇の匂ひを求めたり

兼題 犬

晴 夫選

青春は犬に物言ふ日も續き

病犬の餌のない哀しき眼をみり

われに尾を振る犬のありさし

落魄を犬に語れば煩をなめ

犬抱けば犬も動悸がうつてゐる

すくらん犬とある病院のひなた

かくれんば犬尾を振りついて

チン抱いて参錢切手かひに 来る

(人)冬陽ははらゝ犬の欠伸の

(地)口笛へ見知らぬ犬が振り向

(天)初日の出拜みに犬をつき出る

兼題 玩具

靜 太選

玩具箱きれいな石も入れてある

玩具箱きれいな石も入れてある

玩具箱きれいな石も入れてある

拗てゐる兒に玩具が笑つてゐる

玩具もと並べ亡き兒を追ふのです

玩具たんと買つて貰つて内氣な子

玩具らしい玩具もなくてまて

(佳)玩具つぶして子供丈夫に

(同)わが夢の毀れし玩具にも似

(同)玩具箱はめると動くものを

(同)玩具から兒の元日が明ける

(同)玩具もては貧乏の正月は知らず

(同)雲の色玩具のやうに夕暮れぬ

(軸)玩具もつて兒へ美しく時雨

兼題 雜誌

青 鬼選

れむくなる迄を雜誌はめくられる

雜誌から美人の秘訣見つけ出し

吊革の揺らいで雜誌閉ぢるなり

君の死へ川柳雜誌おちてゐる

(佳)年賀狀に雜誌が一部混るなり

(軸)待たされる積り雜誌を持て行

兼題 姉妹

康 夫選

姉妹の噂さ出て居る喫茶店

冬空にいたむ姉妹の手があら

病んでから女の姉妹がほしくなり

姉妹のやうに寶塚にゐる

肺で死んだ姉妹も美しい

海岸へ姉妹揃ふた汐干狩り

姉妹同じ柄に似合ふなり

(秀)冬の陽のまごころに姉妹も

(同)妹へだけ姉からの便りが来

(同)保護室の姉妹すみにうづく

(同)姉妹の母はそれ者の上りなり

(同)眞白い夢の中なる姉妹

芭 子

寒 子

青 鬼

一 更

流之助

青 鬼

松 雨

一 更

廉 夫

風心子

紅 子

のぼる

松 雨

靜 太

青 鬼

好 峯

紅 子

潮 太

靜 夫

理 庵

松 雨

晴 夫

紅 子

松 雨

理 庵

晴 夫

紅 子

松 雨

理 庵

晴 夫

紅 子

松 雨

理 庵

採用を祈る靴音急いでる 敬人

看護婦のこの頃馴れしハイヒール 紅馬

緑雨氏の靴音もせず初句會 一馬

ゴム靴の先きにつめたい音を立て 他津秋

(佳)大阪の音の一つの靴を履き のぼる

(同)戀もない男の靴がちびでゐる 靜太

兼題 紋付

松 雨選

紋付を炬燵へ掛けて寝てしまひ 青鬼

紋付の顔のそつた歌留多會 後水

紋付の酔ふてゐるとは見えす 靜太

でかんしよで酔ふ紋付モーショング 青鬼

(軸)親戚の不幸紋付き借りられる 松雨

川柳 神戶都友句會(神戶)

雜誌社

十二月十二日 於明珠居 明珠報

兼題 開店

店華水、春秋、明珠共選

開店は棚の端から儲ける氣 竹楓

開店の電氣近所の子が遊び 幸水

失敗を笑つて開店の夜 繁堂

開店の隣が水を撒いて呉れ 竹楓

開店へ厚司の襟もピンと立ち 吉左右

開店へ姪は島田で店に立ち 同

算盤を不器用に置く開店日 同

開店日戸を閉めてさへ落つかず 同

寝るところをせがめ開店準備なり 同

開店はさくら様の客でこみ 同

開店に主人の聲がとびつてゐ 同

兼題 敷居

靖 弘選

恐れ入りますと敷居にけつまづき 春秋

お正月店の敷居ははまつてゐ 華水

決心がつかず敷居みつめてる
皆同じ顔で敷居をまたぐなり
(秀)悲しくも敷居に涙落したり
(軸)喜びの聲が敷居をこえてゐる
靖弘 同 明 珠 堂

繁堂、幸捐共選

襟をあけてあわせて女酔ふてゐる
生活にわけられ襟足のぞかれる
襟巻の置場忘れた二階借
襟あしをはつきり見せて宵なりき
明 珠 堂

襟あしをはつきり見せて宵なりき

長煙管襟をきにして炭をつぎ
襟深く去年の揚子折れてゐる
れんねこの襟を直した立ち話
華 水 堂

華 水 堂

綿名だけ覺え仲居は如才なし
四十すぎニツクネームがふと淋し
淋しくも綿名を母も知つてゐる
明 珠 堂

明 珠 堂

青空へ財布に五圓札があり
青空を走り疲れて犬とゐる
青空へ今日もすまない懐手
繁 堂

繁 堂

川柳 今治忘年句會 (今治)

十二月十日 於熊の井樓上 曉 童 報

今治名所名物に因みて

築港へ来て氣の變るバスケット
父かへる日の築港の波をみる
内港の隅に小さく舟世帯
山丹の荷へ船足のひくい舟
こも包みタオルと知つた港町
染糸を干して見上げる朝曇り
検査場今出る馬車は輸出品
小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

小 樓 聲 堂

ネルだタカアルだ築港の晝
惠まれの身へ慰めの南光坊
國寶藥師堂
マバラたる木のいはれなごきく
かまぼこの包が重い遠出歸
堀かきの櫓下げてゐる待合所
天ぶらは今治の味ときめてあげ
堀かきの味も宿屋でおしへられ
シゴキ結んで女工十八
青白く女工それでも生きてゐる
銅像へ工場の音の威勢よし
初島島の渦に旅愁をふと感じ
初荷待つ内港にある船の數
黄昏は石槌山の姿から
廣小路一直線で海のみえ
四坂の灯うすれて戀もない夕
防波堤夜釣の人の咳を聞き
バスガール本町へ来た聲になり
バスガール笑つてすぎた知つた顔
濱焼は東京までの旅姿
鯛網は別府航路の波へ愚痴
鯛あみへ繪日傘小さくゆれてゐる
鯛の値を三べんきいた京訛り
久しぶり會つて本町短かすぎ
古城址歩めば松頼の音ばかり
銅像もけむりにむせてゐる姿
吹揚の櫻の頃に知つた頃
ラヂエウムへ満足そうな父の顔
機手して移轉地の風に乗る
移轉地へ心が向いたむかつ腹
稽古三味花の頃には出られず

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

史 童 朗

移轉地と合點ハンドルにぎりしめ
蒼社土手男がれてる青い空
蒼社川流れる水にうつる戀
蒼社川六百年の松あををし
本町を一べいにバスゆれて行き
本町へ女は別な氣で動き
おちぶれて歸れば故郷の山紅葉
公園を斜に横切る試験前
賣出のビラ飛んでゆくアスファルト
盃洗、葉はたん
まだ酔つて居る盃洗の水をきり
盃洗へ舞妓のそでが長すぎる
盃洗の水がゆれてるデツカンシヨ
うちあけもせず盃洗の水をみる
盃洗を前に重役肥えてゐる
はばたんがしをれた春の炬燵です
葉はたんへ女氣まうい暖を投げる
葉はたんへ娘としての瞳を落し
葉はたんの一葉しをれて妻の病み
心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

心 府 松 堂

兼題 輪

御手植の松へ生徒の輪を作り
輪を書いて香具師横着な口なき

(五)人の輪え来ると自轉車^{こま}を降^{くだ}

(同)輪替屋はのた打^{うち} 竹を巻^まき

(同)バツト輪に吹き 甘き空想

(同)見世物じやねと酔ひざれ輪^{りん}

(同)ゴムバン 外せば元の輪^{りん}に歸^{かへ}

(人)指の輪へ母小言もそへて呉^{くれ}れ

(地)碌でない話しは指で輪を作り

(天)人の輪の中でひもじい子が踊る

兼題 春の感じ

盆栽の新芽を齒磨きふと見つけ

一年の計がぐらつく二十日過ぎ

チラホラト 逕路が通る道になり

弾き初めの調子に乗つた春心地

つつかけたフエルトの緒がゆるい

朝の陽を背にふくらむ梅へ立ち

(秀)ずり大根の味へ立春

(同)日溜りに梅の蕾を数へて居

(同)ふきのとう庭の隅へ春を告げ

(同)カレンダーの厚味今年儲け氣

(同)みの虫を軒に見つけて二三日

(同)二月の陽ふと土魂を^{こゝろ}で見

(同)名ばかり。春インバの襟を立て

(人)北風の中で夢の芽見つけた

(地)春の宵うかと其の手に乗^{のり}

(天)春の氣になり酔ふた靴音

(軸)團體の船から伊豫の春はあけ

席題 寝息

松葉

時雨樓

かき松

拓水

心府

かき松

五健

双葉

五健

白羽

健選

かき松

拓水

大觀

バリカン

時雨樓

大觀

芳岸

白羽

心府

拓水

芳岸

宵明

双葉

小樓

大樓

靈子

五健

峰選

朗らかな寝息のもれる枕蚊遣^{バリカン}

父親の寝息が恐い午前二時^{大觀}

長じゆばんほんとの寝息知^しる居^るり^{時雨樓}

更けて行く寝息の中の針仕事^{拓水}

罪の無い寝息の中にして眠^るり^{バリカン}

年頃の寝息へ母のつまる胸^{素泉}

(佳)忍從の寝息小さく慄へて居^る大樓

(同)圓らかな寝息で明ける共稼^ぎ大樓

(軸)病人の寝息を聞いて出る疲れ^{春峰}

非常時の入營派手に見送られ^{素泉}

入營の朝へ我が子のたくましき^同

入營を緊張させる霜の風^{大觀}

丸刈りにして入營の日を數へ^{バリカン}

入營へ子供も一人ある話し^{双葉}

入營の夜はきゆうくつなだけで^{靈子}

兼題 山或は峰^{時雨樓}

明日登る山を見上げてキヤンプに^{月畝}

征服の峰一杯に陽があたり^{白羽}

榛先きへアツタリ歸る登山服^{かき松}

無刺戟な山の住居に馴れて無事^{大觀}

山の名へ娘の名も覺え長湯治^{五健}

キヤンプの灯山の獵奇へ太くゆれ^{曉童}

富士山に似て居て名所圖繪にけれ^{五健}

(人)あんな山にも住めるのか灯籠^{心府}

(地)噴火口人の智慧なごよせ^{五健}

(天)占領の山隊長の名で遣り^{松葉}

兼題 彼女^{清記}

境遇は彼女に比して羨まれ^{松葉}

約束を守る彼女は老けて見へ^同

案外は彼女煙草を吹かずなり^{春峰}

斷髪彼女の胸に古いきづ^{バリカン}

本當に死ぬ氣で彼女笑つて^{靈子}

割前を彼女も出してしたしめ^{素泉}

彼女から處分に困る貰ひもの^{大觀}

彼女ふと口を利かないうになり^{時雨樓}

春の宵僕も彼女とばけて居^る大樓

小説の通り彼女の持つ理想^{五健}

眞剣を小さい欠伸にする彼女^同

川柳 薮川句會(出雲)

正月五日 於第十四區俱樂部

兼題 縁談^{尼縁之助報}

縁談が纏りそうな身の悶え^{紫光}

嫁ぐ話にひる風鳴れり木が鳴^{羅門}

縁談がまとまり春の歸うれし^{田鶴緒}

(人)見合の縁談ばかりタイピスト^同

(地)縁談へ溜息ついて笑はれる^{鶴天}

(天)縁談は父のもの戀の俺のもの^{夢人}

同 純潔^{門選}

純潔を誇つて淋しき日の女給^{田鶴緒}

純潔をつける懐ひ春は明け^{縁之助}

純潔を忘れるに夜に直面し^同

(秀)涙はあつた純潔がもごら^同

(同)純潔が捨へよと主義が言ひ^{夢人}

兼題 硝子^{田鶴緒}

硝子透きとほりたる憂鬱^{夢人}

(人)硝子戸に嬉しき笑ひこ^同

(地)正體は失せ硝子み^{縁之助}

(天)ガラスに息をかけ子等寒^{好郎}

同 荒れ^{人選}

強く生きる妹の手の荒れ顔の荒れ

(人) つく荒れお酒はとうにならぬ

(地) 暴風雨朝の茶漬

(天) 荒ぶ目のころ冷だし火

同 心 紫 光選

ころ冷たくともしひ冷たく風

あさましき心か捨てゝ飯を食ふ

真心が負けそうだ大三十日

(人) 心正となつて荒れ

(地) 心の不満に母の位牌を拜む

(天) 二人あてころうつるな夜話

同 木 枯 羅 夢人

戀人といふ身木枯つて出る

(秀) 木枯が吹く俺の心に似てうる

(同) 木枯に追され階級考へる

同 刺 刀 緑之助 門選

(佳) 朝の剃刀におちつかう

(同) 剃刀持つ手こぼして湧く思案

川柳 松江句會 (松江)

維誌社 一月十二日夜 於天神ミドリ喫茶店

兼題 風 二選

ねかるみは風におされた歩きやう

(佳) 風は風は淋しき君の聲に聞く

(同) 古枯にまるき想ひをこぼさる

(同) 帆柱の先だけ見せて風は風

席題 プラットホーム 可明 明選

プラットで此の土地ばかりの聲

プラットホーム泣き見バスケット

プラットが恐い女の急ぎ足

柳 人

保護願ひプラットホームの隅に

席題 眉 柳 人選

眉墨に疑ぐられさう遺族来る

過去が過去が眉毛を抜きました

眉をひき年ら二皮目がほしい

(佳) 眉墨がはつきり見え嘘を聞く

(同) 眉にははれるには惜しい眉の艶

(同) 晝還の眉墨だつた事を知り

席題 火 箸 都之介選

別るゝ日火箸の先にある哀愁

みぞれ降る夜を火箸としたしふ

灰神樂火箸を持てば焼け切つて

センチメンタル火箸きち立居

決心がついて火箸をさして立ち

川柳 今治句會 (今治)

維誌社 渡邊曉童報

出戻り、保護願

出戻りのカノ子の色も淋しけれ

出戻りの姉白百合を生けてある

出戻りにヤターの鳴らぬ夜と成る

出戻りの心も知らず蛙鳴く

出戻りのあきらめられぬ子の笑顔

保護願母燈明へ灯をともし

保護願鳥の聲を寒うきき

保護願五尺六寸とは悲し

交番の土間が冷たい保護願

御旅吟社

みつる氏歸朝歓迎句會

十一月廿三日 於坂町 いし堂

新天地満洲にて活躍して居た「みつる」君

が歸阪したので例會を歓迎の夕べとして開

催した、吟社の花形であつた「みつる」君の歡

迎宴だけあつてとても華やかな楽しい句會

であつた。

席題 犬 多 郎選

まゝことの犬がお客の面白さ

病み上り犬が走つて來て呉れる

幻想な点がく襖に夜の音

襖みな悲しき事に外される

(五) その宿の悲喜の境に立つ襖

(同) 襖もやらず襖に思案投げかり

(同) 襖にちんですれた妓のうなじ

(同) 待たされる一人に廣き襖かな

(同) 襖開ければ敷居冷たかり

(人) 襖繪のすゝけし儘に親しまれ

(地) 喜びの聲に襖は張り切つて

(天) しめ切つた襖が俺を落し込み

(軸) うれしさを襖の音にみせて立ち

席題 満 (みち) 込み 緑 雨選

満面にこぼれる笑顔よせて来る

満足に書けぬに筆をもたされる

満洲へ行つたと見へぬ顔と逢ひ

満洲のエログロ聞くと夜のほめき

満たされぬ心を水にうつしける

満洲の語で今宵も飲むつもり

(佳) 満洲のエロはエロはとせめ

(同) 満洲のあとに淋しい影を踏み

(同) 満洲の拍手へ靜かに暮が下り

兼題 鮮 素 人選

味覺みな集めて壽司は並びたり

(人)豆腐屋を呼べばゆつくり向ふ
某 人

(地)湯豆腐に故郷を捨てた風の音
九 天

(天)賣り切つて豆腐の水を撒去
喜 山

(軸)湯豆腐へ坐つて低い日本人
山雨樓

安 心
山雨樓選

智慧熟と判つて朝を早く出る
伊 八

店に慣れ氣受もよいと初便り
吞 舟

月のものあつたと聞いて安心し
比 良男

留置場安心しきつた寝顔なり
青 吾

(秀)安らかに寝棺の花に埋つて
木 石

(同)消防が歸ると急に睡くなり
某 人

(同)顔見れば用事の濟む母だ
村 夫子

(同)合格の親子へ校舎聲へ立ち
喜 山

(同)大根を漬けて隠居のくつる
九 天

(同)安心の瞳あつて灯が明し
明 坊

(同)餅も搗き松も立てたる風の音
水 客

(人)末っ娘の結納へ父猪口の數
九 天

(地)金策がつと車中の富士を見る
明 坊

(天)はつとした聲で家出を叱る
某 人

(軸)刈り取つた一家大飯くらひ
山雨樓

川柳ざんぎり (四)

一月三日夜 於魚伊樓 四枝松規堂報

寒の入貞女、寄附

祖母がまた空瓶探す寒の水
規 堂

子の横へ貞女小さく撮される
同 舟

寄附帳へ第一番の墨の色
舟 々

草 笛 偶 會 (松江)

十二月二十九日夜 於夢迷居

君ヶ代へ喉のかすれは笑ふまい
互 選

君ヶ代が聞けて病床固くなり
巷 二

校長の唇も君ヶ代をうたひ
柳 人

男親産湯にそつとのぞくだけ
天 痴人

神聖な産湯の部屋に五十燭
二 巷

京の顔見世觀劇會 (その五)

十二月八日 於京都南座 水谷鮎美報

吾が事のように松浦狂氣めき
觀 月

松浦の馬から落ちるうれしさ
同 月

腹立ちを煙草にかへる松浦公
夕 鐘

鈴振つて目出度づくめの三番雙
觀 月

三番雙系のもつれた藝になり
同 月

折たゝみできるかたちにつ伏し
觀 月

旗本の生ひとすじが殺させる
夕 鐘

足音がして決心の皿を破り
觀 月

つ ど ひ (第二十回)

吉田水車報

浮き島の見ゆる景色へ舟を出し
夕 鐘

島育ちネオンへしばし氣をとられ
同 鐘

島影に待機姿勢のまゝ暮れる
同 鐘

觀光團島へ豫定をのげすなり
同 鐘

靜波鮎美對座吟

一月七日 靜波居 松枝靜波報

雪、座蒲團
靜 波

子は庭へ妻は炬燵で雪を見る
同 波

座蒲團におちつきにくい若さです
同 波

雪降れば尾をふる犬のにさんびき
鮎 美

出展つて雪降る晝を寝てしまひ
同 同

座蒲團へそるばんおいて逃げて
同 同

ひかり集 (二十一)

水谷鮎美報

松 風

松風はやさし片戀は蟹とある
ト 居

松風にア女のいのちためさるる
鮎 美

松風にさびしき人になりきれる
同 居

松の風窓あけはなちたる想ひ出
同 居

貧兒明珠對座吟

十二月二十三日 明珠報

マツする音やこゝろやよりほち
貧 兒

こゝろ素直に殘業の灯をつける
同 兒

子が寝てる時分いのちの手が凍り
同 兒

殘業の窓一杯に夜がせまり
同 兒

黒潮吟社句會 (新宮)

泉 昨夕報

題 晴れ、満、寝顔、餅
選

酒、挨拶、
同 選

捨子とは知らず寝顔が覗かれる
一 曉

スコップの音賑やかに溝が出来
同 曉

たそがれて酒買つて行く女の子
流 人

その上の酒へ女房の睡が光り
昨 夕

挨拶はハッキリ聞えぬ内に済み
流 人

挨拶が屠蘇の酔からくすれかけ
一 曉

挨拶に来て窮境の彼を知り
南 泉子

鮮取つて女同志のよく喋り毛氈の上へにお餅が撒げられ握りすし大阪辨は問がぬける姑の機嫌は餅を巻くと云ふ(軸)幸な事には女房餅がすき

素人

親心寝巻にまでもこもつてゐ旅の氣もつるつるでんの寝巻からあすは又あすの事だ寝巻出せ寝巻にと彼女の呉れた浴衣立てひざの寝巻は煙管長がう見せ寝巻たゝむ妻の姿のうら若さ

多郎

電話口寝巻姿としらぬ也庭先を見るも寝巻の久振り親しさは寝巻の子供顔を出し金借りに行けば寝巻でメスト會ひ

紀太

ネルと云へばネルなり寝巻温かす頓服は寝巻の儘で一つ賣れ睡られぬ夜なバジャマの儘に飲む

同

(人)泊らしてもらひますと長襦袢(地)輕々と寝巻を纏にするばかり(天)ひき身の布團を敷けば寝巻が出

同

(軸)寝巻だけ持つて来られ忘れ果て(同)貸してくだ寝巻の方がよい

同

伊藤愚陀追悼句會

十二月七日 於蓮久寺 友帆報

若くして亡くなられた奇才愚陀氏の一週忌を迎へ最も親しかつた私等の手によつて追悼句會を催しました。特に故人の監督になる九ミ映畫を長谷川氏の御好意によつて

映寫していただき、母堂の御出席あり師走の一夜に故人を偲びました。

追悼句

極樂で潮路續篇出來上り永遠に十六ミヘ生きる愚陀童顔とまの眼鏡と金ボタン風音に愚陀の眼鏡の人間味

友帆

メガホンの君ル僂びて夜が深し(軸)ダルシニヤ畫面におどる

水車

フダリンの夢のなかみダルシニヤ(佳)ダルシニヤお酒のうさ言ひ(同)幻想に女の顔があるばかり

緑雨

(同)ダルシニヤ師走の街で肩(軸)ダルシニヤ畫面におどる

水車

戀人の日傘の重い日もありし戀人の淋しい唄が好きと言ふ戀人のうしろ姿へ氣が弱し

白戀

(佳)戀人の袂が輕い寶塚重役の椅子は今日そのまんま忙しうに閉そくに重役ある

緑雨

重役の掌にまぢかなるさくら炭重役は電話へたの人の人となり

しのお

スクリューの泡へ渡とはががらず泡と泡ヒョソコリ寄つて見たく(軸)無口迷惑の様に無口が惚れられて無口から意外の語聞かされる無口者よほごうれしいらしいなり

翠夢

田も畑も賣つて無口な父となり案外な無口うれしい初對面想像にまかせきつて無口者

白戀

石鹼の泡へ子供が急に泣き石鹼の泡へうれしい事想ふ

同

石鹼の泡へ残して子が戻り露の泡まじ魚屋の籠にあり蟹口者話せば恐い事を云ひ

水車

灰少し捨て、無口の晝となる

水車

光笑會新年句會

一月十四日

於カナメ喫茶店

エキストラ差した刀を抜きたがり昨日より刀が輕く雪が降り床の間へ寶刀を飾つて春に降る

夕鐘

落ぶれてゐても中身はそのまんま(佳)刀屋が鑑定するとそれほごの(同)好い月に刀が抜いてみた(同)引込みのつかぬ刀となりに

同

今年から貯める氣持の寝正月寝正月こけた小餅の二つ三つ寝正月みかんへ長い手むのばし

昇光

寝正月猫は時々遊びに出る者は出して落ち着く寝正月

水車

一人娘は鏡に不足云ふている自惚れは鏡の前でけつまづき

丹生

朝風呂の鏡の中で話し合ひ
半身を寫して女は出る姿
(軸)散髪鏡におだてられて出る
艸雨

大笑ひのうちで要領つかんで居
大笑ひ仲居げんな顔で来る
出雲屋の二階から下りる大笑ひ
まかないの方からもれる大笑ひ
秋選

川柳
加茂川句會 (京都)
十二月九日(夕) 於下鴨眞方波樓居
新年號四大附録が引く心
悔ゆる事ばかりへ冬がやつて来る
話したくない日眼鏡もふかすゐる
断ち切れぬ思慕とはなりて影と
愛着は去すアルバム冷めたがり
おかアさんと呼ぶ子の聲が大きい
単一

畔柳社會報

十二月十六日 於大鐵俱樂部
披講五選

堀制へ女車掌の重い聲
腕章を取つて車掌は氣輕なり
終電の車掌と心濁くなり
終電の車掌の瞳濁つてゐる
車掌の顔三度代つて着く故郷
交替の車掌折目の服で来る
警文の街を車掌は見ればかり
急停車車掌の動作見つめられ
バスガール三越前で力入れ
席題 師走 清記 互選
コマ下駄のもつれ師走のよい景氣 見路

投資の聲のカスレへ師走の灯
煩骨高く師走の風當る
年の市今年の聲を出しちまい
南座で難妓師走をまぶしがり
住みなれた坂を下れば師走の灯
社會編銀狐には聲をあげ
インフレーションもある年の暮
師走を小僧主人の氣になり
ホーナスの話先生酔つてゐ
子もなく三十路の師走寂しがり
時は金師走の街をからつ風
伊八青吾共選

席題 鍵
氣がせいであるにおんなじ様な鍵
鍵かけて露骨なことへ觸れてくる
鍵持つて亭主のあとから走らさる
鍵一ついらぬ世帯舟を押し
合鍵持つて守衛の老眼鏡
十二犯鍵はいらぬと告白し
(軸)鍵持つて女主人の深い影
天八選

はり詰た意見へおじぎばかりなり
意見あり不平な顔が立ち上り
ネオンの灯親の意見もあるもんか
もう意見ありませんかと決議成り
意見も済んで酒冷へて居る
意見するはたで母親泣いてゐる
参考までだがと叔父の恐い顔
(人)意見まだ續いて足の痺れて来
(地)意見する燈明つきにくし
(天)又意見覺悟で坐る夜の冷
(軸)心中に親の意見が間に合はず
天八選

雪洞の下に巡査の野暮な顔
巡査の子親仁のひげを懐し
部長殿と巡査は別の聲を出し
忙しい足を巡査の笛が停め
ストップへ巡査視線を強く浴び
來客は戸籍調の巡査なり
ランデブー巡査の瞳けわしく
繩を張る巡査火事場を背にして
巡査今戀のドライブ停めてゐる
(客)駄菓子屋へ戸籍調が邪氣立
(同)別荘の請願巡査男前
(同)交番の鬚の巡査が菊を栽へ
(同)服脱げば巡査大阪辯になり
(同)戒へ取り込みらんと灯が明く
(人)迷子をあやす巡査の近眼鏡
(地)醉漢と月と巡査の午前二時
(天)十二月巡査の肩がいかるなり
(軸)機數みな泣くへ臨官席はてれ
山雨樓選

豆腐汁匂い一家のすこやかさ
豆腐屋を呼んでる若い聲に起き
豆腐屋の鈴鳴りやまず路次をわけ
夕闇を曳いて豆腐屋賣りに来る
鮮かに切つて豆腐屋鍋にあけ
湯豆腐の湯氣に眼鏡とらさる
(客)豆腐屋の油の浸んだ釣鐘を呉れ
(同)湯豆腐の桶の大きく村の宿
(同)泳でる豆腐で下女は飯を喰ひ
(同)お豆腐は指を携へて水を切り
(同)食慾へ豆腐の色が白過る
青吾

豆腐汁匂い一家のすこやかさ
豆腐屋を呼んでる若い聲に起き
豆腐屋の鈴鳴りやまず路次をわけ
夕闇を曳いて豆腐屋賣りに来る
鮮かに切つて豆腐屋鍋にあけ
湯豆腐の湯氣に眼鏡とらさる
(客)豆腐屋の油の浸んだ釣鐘を呉れ
(同)湯豆腐の桶の大きく村の宿
(同)泳でる豆腐で下女は飯を喰ひ
(同)お豆腐は指を携へて水を切り
(同)食慾へ豆腐の色が白過る
青吾

豆腐汁匂い一家のすこやかさ
豆腐屋を呼んでる若い聲に起き
豆腐屋の鈴鳴りやまず路次をわけ
夕闇を曳いて豆腐屋賣りに来る
鮮かに切つて豆腐屋鍋にあけ
湯豆腐の湯氣に眼鏡とらさる
(客)豆腐屋の油の浸んだ釣鐘を呉れ
(同)湯豆腐の桶の大きく村の宿
(同)泳でる豆腐で下女は飯を喰ひ
(同)お豆腐は指を携へて水を切り
(同)食慾へ豆腐の色が白過る
青吾

川柳
雜誌社

大鐵支部創立記念句會

並畔柳社一周年

一月十四日

於大鐵俱樂部

畔柳社生れて茲に滿一年 福田山雨樓氏の御懇切なる薫育を受けて生長し 今また日頃の念願成つて 川柳雜誌社大鐵支部創立の慶びを見る事となつた。此の日好晴。寒さにめげず集る者三十名 本社より路郎師をはじめ山雨樓、綠雨、豆秋、亂耽、水車、鮎美の諸先輩の御出席を煩はし、誠に盛大な會合を見ることが出来た。某人の開會の辭に續いて山雨樓氏の滋味溢るゝばかりの御感想あり、席間兼題披露の後、路郎師の有益にして興味深き御話を伺ひ、吞舟の閉會の辭を以て一旦會場を退いて別室で懇談會に移り、柳談の放列を布き和氣謠々裡に散會。社中一同より路郎師以下諸先輩に深甚の謝意を表します。

(某人記)

席題 港

亂耽選

港へ着け なつかしいネカンの灯
思ひ出を残す港の時雨なり
港の夜酒の匂で明けて行き
ちと荒れて浮標がもまれた港の灯
アパツシユへ港の景色晴れて見え

一蜂
九天
靈天
綠雨
青吾

出帆の氣笛へ霧の深いこと
遊女街通り抜ければ海が見へ
港の灯 僕の生れは離れ島
(客)五年振遇へる港の波靜か
(同)暮れてから港の空に雲が出る
(同)名利の港見下すここに建ち
(同)マドロスと躍る更ける港の夜
(同)歸朝談のせて港の露へ着き
(人)片戀の雨がさびしい港の灯
(地)人買の船へ港の闇となり
(天)港の深き油が浮いてある

兼題 初戀

鮎美選

秀太

初戀の二人へ月がまんまるい
初戀の睡を丸く見る日和
初戀の時雨るゝ窓へ夜の更け
初戀のはかなく海へ石を投げ
髪分けてわけて初戀朝が出る
初戀へ先生の顔毛むくぢやら
初戀同志兩端へ乗り
初戀へふるゝ足音風の音
初戀は父の變屈知つてある
初戀の藤村詩集今もあり
初戀は紅茶を呑んでゐるばかり
初戀の輕い袂がものたらず
(人)初戀の二人へ雲雀舞ひ上り
(地)思ひやり過ぎて初戀への邪鯉
(天)初戀へちつちやな汽車が騒ぐ
(軸)初戀の川をへだてた朝を起さ
(軸)初戀らしき人の氣もする

兼題 驛

綠雨選

同

驛長の保護にうれしい朝となり
驛長の夕餉に汽車の無事な音
驛長と偶然並ぶ東西屋
驛長は朝の出入にほくそ笑み
驛長はひまに官舎へかへつて來
スキツチを入れて驛長ホットする
雑沓の中で驛長よく目立ち
有力者驛長さんもちつてゐ
驛長の帽子が似合ふ小さい鬚
信號が違ひ驛長あはててゐ
(人)驛長が歩けばホーム落付いて
(地)サイレンへ驛長キツチリ飯
(天)驛長はやつと酔漢汽車にのせ
(軸)驛長はまだフラットに立ち

兼題 日の出

路郎選

某人

ありがたし日の出へ馬糞から湯氣
いゝ日の出もう氷糞がいらぬなり
大いなる日の出へ水菜積まれたり
日の出前鶴空を呑まんとし
貯めること忘れ日の出へ深呼吸
ひとときは日の出に赤く染る國
日の出までもう一刻の炭をつぎ
ハンドルの我れにかへはさす朝日
日が出るゝ辨當箱はあたゝかし
(人)戀の汽車日の出の海を走る
(地)初日の出健康グ راشはかた
(天)土へ歸れ日の出にも教ふれ
(軸)大阪に日の出忘れと暮れて來
(同)煙突の横とは初日哀れなり

(以下次號)

Nishincho MEMO

雨 緑

▼新春特輯號は豫想以上好評で愛讀者諸氏と共に欣びに堪えません。今後も一層御愛讀の上御後援を願ひます。

▼別項社告の通左の方々が同人として入社されました。今後の活躍を祈ります。

笹田角丸君 大阪市天王寺區眞法院町六〇

村田新市街君 同南區日本橋三ノ三

東谷間路君 同北區東堀川町三

平井冬呼君 同東成區東小橋北之町二ノ二八

長谷川三汀君 香川縣坂出町港町

加藤文辭君 愛知縣祖父江町三三

▲大阪鐵道局に支部が新設され

たので一月十四日午後一時より創立句會を鐵道俱樂部樓上で開催されました。本社から路郎先生、亂歌、山雨樓、水車、豆秋、鮎美の諸君と私が出席致しました。當支部幹事は植山九天君で今後の活躍を祈ります。

▼吉田水車君は今里支部幹事として活躍されて居ましたが市場没食子君と交替されることになりました。新幹事の活躍を祈ります。

▼江戸みつる君は、一月廿一日神戸出帆うすい丸にて大連經由で奉天へ歸へられましたので翠夢、紫石、勇の諸君が見送られました。

▼松江支部の奈良井柳人君が多年幹事として活躍されてゐましたが家事都合で幹事を辭されたので梶谷若二君と交替されました。今後の活躍を祈ります。

▼麻生霞乃夫人は一月廿日午前四時男の子を儲けられて「洋」君と命名されました。お喜び申し上げます。

▼大島清明氏は十二月十六日拉賓線鐵道竣工式參列の爲めハルビンへ行かれて松花江ハルビンの冬の情景を味つて歸られたそうです。

▼岸本水府氏の句集が近く刊行

されるそうです。

▼春元紀太君は一月十九日男の子を儲けられました。お喜び申し上げます。

▼新居濱支部の創立に松山、今治の方面から多數出席されたので幹事越智虹子君から喜んで來られました。本社から厚くお禮申し上げます。會報を御参照下さい。

▼増位汀柳君は一月八日信越妙高へスキーに赴かれました。

▼平岩司郎君は十二月十九日同志社大學のスキー講習會で信越線網溫泉へ行かれました。

▼眞田幸捐君は日本一周(神戸東海、青森、羽越、小濱、山陰鹿本、日豊、山陽を經由)の旅に出られて下關と鹿兒島から旅の便りを寄せられました。

▼吉田清壽伯(舍名)は創刊以來本社のため御後援されて居ましたが、阪大病院へ入院中一月廿日四六歳永眠されました。二十一日午後一時大阪阿倍野葬儀所で佛式によつて告別式を営まれ本社から路郎先生、柴谷幸二郎の諸氏と私が参葬致しました。法名は釋清源、哀悼の意を表します。

▼姫田夕鐘君の嚴父十二月二十

三日永眠されましたので郷里へ歸へられました。哀悼の意を表します。

▼竹内機見女さんは十二月二十八日郷里に不幸があつたので歸へられました。

▼櫻井圓角君は家事の都合で同人を退かれました。一日も早く復活を祈ります。

▲左の支部から本社へ寄書を送つて來られました。

新居濱支部創立句會(一月六日)

松山支部新春大會(一月十三日)

螢ヶ池支部新春句會(一月七日)

今治支部新春句會(一月四日)

西條支部忘年句會(十二月十七日)

紫石追悼會(十二月十一日)

松江八東支部の新春カルタ會(一月十八日)

今治支部葉平君を迎えて(一月十日)

帆傘川柳會十二月句會(十二月六日)

▼本號の編輯は山雨樓 二南、鶴峰、豆秋、春光の諸君と私とで致しました。

轉居と改號

▼安川久流美氏は京都府舞鶴町引土町五九

▼北野天馬君は大阪府南河内郡志紀町志紀小學校

▼梅田千秋君は名古屋市中區金澤町一丁目

▼名越不然君は由峰と改號されました。



編輯の窓

山 雨 樓

▼路郎先生のお宅へは新年早々今日か明日かと、出産の日を待諸けてゐられた。一月九日の大阪朝日新聞「新聞街一丁目」にも、一月二十日の大阪毎日新聞「家庭と學藝欄」の隨筆「雪」にもそのことが前振れされてある。しかもその二十日の朝男の子が生れたのは芽出度い。

▼路郎先生は客臘大朝へ執筆され、今又大毎へ寄稿されれる等對社會的に活躍を續けてゐられる。新聞雜誌に先生の進出を待望するのはわれ／＼のみではあるまい。この事が柳誌の聲價に影からざる影響を與へることを信ずる。

▼本號では路郎主幹の「女性川柳に就て」を始め久流美、南北

琴の諸家の、それ／＼滋味に富んだ隨筆を盛ることが出来、新年號の大好評の後をうけて内容の充實を見るに至つたことを諸君と共によろこびたい。

▼「武玉川初篇研究」が柳壇は勿論、國文學の方面からも大いに期待されてある一大研究論功であるが、柳誌と云へば切れつ端の多い研究の中に、正に驚異に價する名篇と云ふべき

である外に連載物では好古氏の「川柳天神緣起」に古風を採り、亂耽君の「江戸のうはさ」に近代味を喫することが出来よう。

▼寫眞畫報も益々好評である。各地の變つた資料はごし／＼送つて頂きたい。柳壇のトップを切つたこの企ては文献資料としても確かに後世に遺るものであるから、進んで厚意を寄せられたいと思ふ。

▼本號の表紙繪は柴谷宰二郎畫伯を煩はしたクラシックな「花かるた」に新味の溢れたところ蓋し柳誌としての偉觀だと信ずる。

日 會 兼 講 會 場 時 題 演 費

本社二月例会

二月三日(土) 午後六時半
道頓堀俱樂部(大阪市南區日本橋南詰東入) 南側 電話南二七四八番
「千日前」(三句) 麻生路郎選
初代川柳の顔 福田山雨樓
金 三 十 錢

▼「名所名物川柳」には北陸の卷を募集してあるが、これには北陸の柳友は勿論、曾て此の地に遊ばれた方の應募を廣く歡迎する。盛んに佳吟を投ぜられたい。

▼月評は一月十日の夜楊井二南居を煩はした。久し振りの同君と紳樂君が突つ込んだところを見せたのは嬉しい。

▼一月六日本社新春句會は盛會

運綱々盛大を告げてゐる。殊に四國ではすばらしい發展振りを 見せ、高知、西條、松山、今治 新井濱の五支部を擁し、四國全土に擴がる日も遠くはあるまいと思ふ。

▼石丸春峰君が一月廿九日商用で來阪されて本社事務所へ訪問されましたが、二月號の校正で綠雨君の不在でお目にかゝれなかつたのを綠雨君が残念がつておました

▼住田亂耽君は一月二日上京されてきやり吟社句會その他の會へ出席され六日歸阪されました。

▼「柳樽研究」の梅溪木卯村は一月六日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼尾山夜半枝君永らく病臥されてゐられるので龜井辰修、神尾三休の兩君の主催で見舞金を募つてあります。一日も早く全快を祈ります。

▼阿形一杉君の嚴父が永眠されました、哀悼の意を表します。

▼故今井卯木君追悼會を緩川柳社で三日夜に催されます。

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。
- ▼書體はなるべく楷書川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十一卷第四號課題

二月五日締切

(各題十句以内)

- ▼陰口 楊井二 南選
- ▼初戀 廣江天痴人選

第十一卷第五號課題

三月五日締切

(各題十句以内)

- ▼猫 西田艸 樂選
- ▼袴 西村山月共
- ▼竹内機見女選

每 號 募 集

- ▼近作柳樽(十句) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定 價

- 一 部 金 參 拾 錢
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年 一月廿五日印刷

昭和九年 二月 一日發行

第十一卷 第二號
(毎日一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生路郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所 川柳雜誌社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番

事務所 川柳雜誌社
大阪市住吉區平野西之町八三番地
電話大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣 捌 店

(大阪) 大賣捌二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
(東東仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚
(京都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

小生

滞京中、一方ならぬ

御高配を蒙り、有難く御禮申上げます

尙ほ今後の御風交の程宜しく。

川柳雜誌社

住田 亂 耽

全東京川柳家

各位

皆々様より年賀狀を戴きまして
有難く拜見致しました

極月の廿三日に父が永眠致しましたので喪中のこと
て缺禮をさしていたききました失禮では御座りますが
紙面を持ちましておことわりやらお禮を申述べます

九年正月

姫田 夕 鐘

川柳雜誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行附すこ
ごに金十錢（但し前金切手代用可）
收銀、郵購、句會案内、柳葉廣告、その他

川柳きやり

菊判每號七十數頁

月刊一部廿五錢郵税一錢

（取次所） 東京淺草小島町
川柳きやり吟社
本社事務所

御挨拶

松山支部

石丸 春 峰

此の度び紫石氏突然逝去され
ました爲後任として五健氏始
め柳人一同の推獎に預り一度
は辭退致しましたが生前親し
かりし故を以つて微力も願み
ずお世話する事になりました
今後共よろしく御鞭撻御指導
下さいます様御願ひ申上ます

敬白

懸賞川柳募集
題「男」 二月十日締切 選

その他難吟を募る

▼用紙 官製ハガキ（化粧柳
壇と明記の事）

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

▼投稿所 大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

菊版九〇頁特輯號一三〇頁

一日發行
春人集

定價一部四十錢 特輯號五十錢
半年二圓三十錢 一年四圓五十錢

大阪市南區心齋橋筋

發行所 番傘川柳社

電話 南一七七三番
振替 大阪七六九四番

小生へのお便りは當分必ず左
記宛に願ひます

大阪市東區北濱五丁目
三五ナショナル銀行内

楊井 二南

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴の瓶たまることたまること
 白鶴へみんな揃ふたいゝ話
 いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
 白鶴を一本つけてからの事
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 當選に白鶴樽のままで来る
 貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘

嘉納合名會社釀



大正十三年三月三日第三號寄便認可(毎月一週一日發行)
昭和九年一月廿五日印刷本

川柳雜誌 (第一二一號)

定價金三拾錢 送料金壹錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舖

いさ下用愛御に直今
りわに店薬品粧化名有國全